

【資料翻刻】高橋亨京城帝国大学講義
朝鮮異学派之儒学：講本（上）

Lectures on Confucianism of the School of Heretics in Chosen (1/2) :
Typing of Takahashi Toru's Lectures in Keijo Imperial University

権 純 哲*
KWON, Soon Chul

ここに、大日本帝国の植民地朝鮮の首都京城に設置された京城帝国大学法文学部教授高橋亨が遺した講義ノートのうち、講本「朝鮮異学派之儒学」と題した昭和十一年四月七日付けの第一冊から第四冊までを翻刻し、上下に分けて掲載する。

高橋亨については、拙稿「高橋亨の朝鮮思想史研究」（本紀要第33巻第1号1997）を、「朝鮮異学派の儒学」については、「〔増訂〕高橋亨の朝鮮儒学研究における「異学派」—京城帝大講義ノートを読む」（本紀要第50巻第1号2014）を参照されたい。

凡 例

- 一 講義は、大学ノートが用いられ、表紙には、横書きのタイトル・冊数・執筆年月日・雅号などが記され、本文は、ノートを横にした縦書きである。
- 一 講本「朝鮮異学派之儒学」は、第一冊冒頭から42枚まではノート下面のみ用いられ、第一冊42枚から第四冊までは上と下両面に書き下ろされている。
- 一 ノートは、漢字カタカナ表記にて、濁点はなく、句読点は、列挙の場合と引用文中に施

されている。改行は、原文引用のほかには、ごく稀に施されている。

- 一 本文は万年筆にて記されている。文中や行間、欄外または上面に、万年筆のほか、赤インキ、赤色鉛筆、黒鉛筆による語句や表現の削除と補足などの修正および長文の書き込みがある。
 - 一 翻刻は、以下のような要領によって行った。
 - 原文通りの翻刻を原則としたが、便宜のため、カタカナをひらがな表記に改め、句読点を加え、改行をも施した。また、異体字はそのままにし、草書体の崩し字は、本字に起した。
 - 合字は、シ、ト、トキ、のように半角カタカナに記した。
 - 適宜、仮題を補充した。
 - 翻刻文中には、以下のような記号を用いた。
- () : 高橋自身が書き込んだ語句・内容

書き込みの多くは、挿入場所に◎、×、□などの印をつけ、上面や欄外の左右脇に同じ印をつけて書き込んでいる。たとえば、◎（上面：◎）のように記した。場所を移して書き込みがつづく場合は⇒を加えた。

挿入場所の印がなく、上面や欄外の左右脇に記された語句、短文や長文は、その場所を記して（上面右脇：）などと明示し、適当な

* クォン・スンチョル
埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授、
韓国思想史・東アジア近代学術思想

近所に挿入した。

——：高橋自身が削除した語句・文章

[]：高橋自身がつけた[補注]

『 』：『書名』

「 」：「引用文、引用語句、用語」

[]：[権による補注、補充]

／：改行

□：未解読字・未確定字を囲んで記した。
文中にある空白にもこれを入れた。

3. 気聚散

4. 氣質不滅及死生観

5. 道德及修養

二、盧蘇齋 (25)

1. 畧蹟

2. 学説

三、花潭門人及李一齋

1. 花潭門人 (8)

2. 李一齋 (5)

[続] (1) 第三冊 講本 天室

李朝儒学第二期及第三期に於ける異学

※以下は(下)にして次号に掲載

緒言 (6)

第一章 尹白湖

第一節 事蹟 (15)

第二節 学説 (16)

[第二章] 朴世堂

第一節 事蹟 (8)

第二節 学説 (26)

[第三章] 鄭霞谷 第四冊 講本 天室

[一、事蹟] (7)

二、学説 (13)

三、霞谷門人 (3)

[第四章] 丁茶山 (2)

一、事蹟 (19)

二、茶山経学 (28)

1. 『大学』

2. 『中庸』

3. 『周易』

一、推移

二、互体

【中絶：四冊終】

〔講本〕全冊統合目次

朝鮮異学派之儒学 第一冊 昭和十一年四月
七日 天室

序論 (40)

[異学の概念]

[朱子学の東方伝来]

[元の学界・科举制度]

[明朝の官学と朝鮮の官学]

[朝鮮儒学の三期区分]

第一章 朱子学 (2)

朱子学統 (1)

朱子の生涯 (9)

学説 (1)

一、理気説 (10)

二、心性情論 (9)

三、修養論 (11)

四、政治論 (6)

[朱子以後の儒学：三学派]

第二章 朝鮮儒学第一期に於ける異学 (2)

一、徐花潭 (5)

[一、事蹟]

[続] (2) 第二冊 講本 天室

二、学説 (19)

1. 太虚

2. 理気

* (数字) は、該當項目の概算ページ数。

* [] は、権による仮題の補充。

序論

〔異学の概念〕

此に朝鮮異学派の儒学を講ずるに當りて、先づ其の所謂異学の概念を明にせざるべからず。

古来、儒家に在りて国家と殊別なる教学を呼ぶに異学与異端との二称あり。而して異学与異端とは、其の指す所を殊にす。異端の出典は『論語』卷二「攻乎異端、斯害也已」にあり。攻の字、古来二説（あり）一は以て「攻治」となし、一は以て「攻撃」となす。朱子は前者に従ひ、竹添博士の『論語會箋』は後者に従ふ。異端の解、数種あるも、劉寶楠『論語正義』の注の取れる何氏注（上面：魏何晏、宋邢昺）

「善道有統、故殊塗而同歸、異端不同歸也。」を最簡明となすべし。邢氏は更に之を（全体的に）明白になして「異端、謂諸子百家之書、異端之書、或秕糠堯、舜戕毀仁義。」と云へり。

されは、端とは緒にして、異端とは先王の緒を續かざる者を謂ふ。故に異端とは即異道・異教にして、従て我か儒教とは、其の教祖を異にし、其の人生觀を異にし、其の個人及国家社会に對する理想を異にす。韓退之の「原道」に所謂×（上面：×老子…〔之小仁義、非毀之也、其見者小也。坐井而觀天、曰天小者、非天小也。彼以煦煦為仁、子子為義、其小之也則宜。〕…其所謂道、道其所道、非吾所謂（道）也。其所謂德、德其所德、非吾所謂德也。凡吾所謂道德云者、合仁与義言之也、天下之公言也。老子之所謂道德云者、去仁与義言之也、一人之私言也。）即是なり。

されは、孔子生存當時の異端は果して何を指されしか、今定かならず。丁若鏞の『論語古今注』には、其の以て老莊楊墨なりとなす説を駁せり。然れども、當時儒家以外諸子百家家の説の倡へらるにありて、孔子の道と相合せざる道を説きし事は、『論語』にも昭々として徴すべく、

而して孔子後百年、老莊楊墨の学、大に門戸を張れり。されは、孔子の指す所の異端か老莊楊墨ならざるも、後四家等か儒家に對抗して他道を説くに至りて、四家か儒家より視て異端の魁たることは疑ふべからず。又爾他諸子百家、亦之を呼ぶに異端を以てするを妨げず。漢以後に至りては、道家と仏家とか二大異端となれること、韓退之の「原道」の称論する所の如し。

然るに、異学は異道にはあらず。其の同しく先王先聖の道を以て道となすは、儒家と殊ることなし。同しく孔子を以て教学の祖となす。而して猶相呼ぶに異学を以てするは、何故か。

異学の概念の尤明瞭に述べられし者に、日本寛政二年庚戌五月幕府より林大学頭林信敬に達せられし有名なる「異学の禁」公文あり。文に曰く

「朱学の儀は、慶長以来、御代々御信用の事にて、已に其方代々右学風維持の事、被仰付置候得は、無油断正学相励、門人共取立可申筈に候。然處近頃、種々新規の説をなし、異端学流行、風俗を破候類有之。全く正学衰微の故に候哉、甚不相濟事に候。其方門人共の内にも右体學術の純正ならざるもの折節、有之様相聞如何に候。此度、聖堂取締嚴重被仰付、柴野彦助・岡田清助儀、右御用被仰付候事に（候）得は、能々此旨申談。急度門人共異学相禁、猶又不限自門他門申合正学講究致、人材取立候様相心掛可申候。」

以て異学の称の正学に對する者なるを知るべし。

蓋し徳川幕府は、家康か藤原惺窩を尊信し、請て其の高弟林羅山を顧問に聘し、学政を委し（後、子孫代々大学頭となり）てより、朱子学を以て官学となす。然るに寛永〔三代將軍家光治世〕頃より中江藤樹の陽明学、山鹿素行の古学、伊藤仁齋の古学、次て荻生徂來の古文辞学（左脇：正徳・享保〔八代吉宗〕）倡へられ、朱子学以外の学派の勢、寧ろ朱子学を壓するに至

り。(上：伊藤氏は以『大学』孔氏遺書に非すと
なす。)而シテ古文辞学派の末流に至りては、礼儀
の檢束を棄て、風俗を毀るの弊亦起る。是に於
てか、(再度)異学与正学の区別を正的確にして、
国家の學術的所尚を明にせざるへからざるに
至れ(るな)り。

されは(国家より觀れば)異学とは、正学を
~~一~~国家に對して一個の曲学の旁学・僻学にして
同しく聖人の道に属すと雖、其の所説、猶醇な
らずして疵玷あり、以て国家官学と立つる能は
ざる所の學術なり。換言すれば、官学に對して
別なる学派に属するものなり。故に又其学祖を
異にすとも觀ることを得へし。されは、国家と
しては國民の爲、学者個人的に其の信する所、
好む所に從て異学を治むることは、固より之を
禁せずと雖、国家公設の教育機関にありては、
其学を講することを禁して正学に由りて學術を
統一せんとするなり。

是れ、寛政異学禁令の宗旨にして、本禁令に
由りて幕府の官学は勿論、各藩の藩学亦漸次異
学を排斥して朱子学、正学として其の(独り)
王座に坐す。故に幕末の儒官近代の鉅匠佐藤一
齋其人の如きく、必しも朱子学を醇守せず、陽
明学をも取らんとする者の如きも、表面は専ら
朱子学を標榜し、内王外朱の称あるに至れり。

朝鮮儒学に於ける異学の意味も、全く徳川時
代の異学与相符合す。国家の正学は、是れ朱子
学なり。故に朱子学以外の学派に属する儒学は、
是れ異学なり。

而して朝鮮にありては、壬辰役(光海君以)
後、政党の争鬪益々劇烈を加へ、遂に学説と党
争と相結著くに至りて、此に異学の排斥一層辛
刻となり、殆ど異学を目するに異端を以てし、
所謂其害猛獸洪水よりも甚しく、異学を奉する
者を以て斯文乱賊となす。從て~~日本~~(寛政)異
学の禁か決して個人の異学講究を禁する者なら
さりしに對して、朝鮮の学界は、異学を講ずる

者をは其の私的生活(の安穩)さへ寛容するこ
となく、終に「寧ろ孔孟に背くあるも朱子に背
くある勿れ」と称せらるゝに至れり。

是意味に於て、朝鮮の異学は、異端の如くに
排斥せられたり。從て異学を奉する者と雖、公
然其の所信を明にして朱子学の聖学に合せざる
あるを批評するかの如きに出ること能はず。若
し爾かる明白なる態度を採れる者は、其の終を
合とする能はず、勿論朝廷には容れられず。故
に異学を治め異学を奉せんとすれば、隱遯生活
に入る外なし。×(上面：×然らずは、外朱子
を奉シ、内私に他説を採る外なし。)畢竟、朱子
学は、朝鮮に在りては學問にして同時に宗教的
實質と權威を有せり。故に其学徒亦殆ど朱子教
信徒と稱するを得へし。朝鮮朱子学の學風の極
めて狹隘にして異学に對する寛容性に欠如する、
亦已むを得ざるなり。

〔朱子学東方伝来〕

次に、朝鮮儒学は、如何なる徑路を取りて(斯
く堅固に)朱子学を以て(唯一)正学と立て
~~る~~(て他学を排する)に至りしかを述へさ
るへからず。

朝鮮に於ける儒学の最盛期は、固より李朝な
り。然れども、李朝の儒学は高麗儒学の継紹にシ
て同時に其の向上進歩に外ならず。

蓋し儒学と云ふは、詳には儒家の哲学と称す
へく、儒教では単に日常実践の道德を説き、政
治の常經を説ける者とは觀して、之を一個の
哲学的体系を組織する者と觀、宇宙問題・心性
問題等を解釈して、以て道德及政治に向て原理
を据ゆる所の(本体論たり)目的学規範学たる
価値を認めんとするなり。從て儒学を学ぶ所の
者は、単に訓詁記誦又は詩文の練習を以て満足
すへからず、思攷を通して理性に照らし、我が
思想と信仰との安定を得るに到らざるへからず。

而して新羅より高麗の中世迄の儒教の学は、

主として訓詁記誦の学たるに止まり、猶未だ思想信仰の学たるに到らず。當時にありて国民の思想及信仰を支配せる所の教学は専ら仏教なりき。彼の海東之孔子と称せらるゝ崔沖か、靖宗・文宗兩朝の丞相として、前朝契丹の入寇の為に荒廢し衰頹せる文教を回復せんか為に、九齋を立て十二徒私学の先驅をなし、大に奎運を興せりと雖、當時の漢学は、猶訓詁及應科詩文の作製の外に出でず、哲学として儒教儒書を研究する儒学の發達を見るに到らず。其後二百年、高麗の宗教及哲学は、仏教の占断に皈し、文学の士と雖、(其) 宗教としては仏教を信じ、単に日常彝倫の道德及文学の軌範として漢学を学ぶ有様なり。

然れども、毅宗朝武人鄭仲夫、歴代尊文賤武の慣例に憤慨して劍を抜きて起ち、遂に政權を武人の手に奪取する迄は、尚文の風習、闔国に洽く士人にして漢学を治めざるはなく、庠序太学、盛にして奎運斐然たる者ありき。毅宗以後に至りて、文武の位地を轉倒し、無学なる武弁(崔氏) 執權となり、文臣中に逃避思想興りて跡を晦まして深山幽谷に遁し、甚しきは祝髮して危禍を免るゝあり。遂に子弟教育の大任も、往々にして儒士の手より山寺僧侶の手に移り、中には偶々執權の鼻息を伺ひて一時々めきし李奎報・崔滋の如き文士もありしと雖、大体に於て学闕校頹廢し学問衰微し、文教の命脈、一縷の如し。

既にして元の世祖皇帝、従前元朝の高麗に對する武力的征服の方針を変して、単に属国として朝貢の礼を取らしむるに止め、畧ほ内政の自治を許し、公主を国王に降嫁せしめ、極めて親善關係を締するに至りて、元朝文化は、其の風俗言語と共に滔々として高麗に輸入せらる。是時、南宋の理学亦漸く北方に将来せられ、燕京に新刊朱子の書現れ、其太学に朱子学講せらる。

是に於てか元の朱子学、彼の高麗国学を再興

せる安珣に由りて朝鮮に伝へられ、此に始めて朝鮮に真の儒学の影を印す。于時、忠烈王十六年なり。故に朝鮮儒学の祖は、安珣を推さるゝへからず。爾後、斯学を講究する者相踵き、白頤正、權溥、禹倬、尹莘傑、李瑱、辛葺等相承けて之を倡へ、遂に国末に至りて李益齊、李牧隱、李陶隱、鄭圃隱、鄭三峰、權陽村を出し、国学全く朱子学に歸一するに至り、以て直に李朝に遷る。

安珣 [高宗卅年 1243~1306 忠烈王卅二年] か初めて朝鮮に朱子学を将来せしに付ては、異説あり。先つ『高麗史』、此を言はず、反りて權溥、白頤正、禹倬三人の列伝に於て各单独に朱子の著書に依りて(首として) 朱子学を唱へし事を云へり。是事に付き、少しく辨せざるへからず。

安珣、号は晦軒、初名裕。李朝となりて文宗の諱を避けて一般に裕を以て呼はる。順興の人なり。十八歳、科挙に及第し(詩文に名あり。) 廿八歳、三別抄の乱には一旦捉へられしか巧に脱歸り、之より元宗に知られ官位順調に進む。忠烈王亦頗る彼を信任す。其十五年、彼四十八歳、王に従て元都に赴き、其の翌年、新刊朱子の書なる者を見(千載不伝) 聖学の緒、此に在りとなし、自つから之を抄寫し、又孔子及朱子の真像なるものを写して回る。五十五歳、世子式保に進み、私第の後に精舎を立て孔・朱二子の真を奉安して祭祀し、猶晦庵景慕の意を寓して自ら晦軒と號す。翌年、復た王に従て元都に赴き、五十八歳に終に相を拝し、翌年、傳錢を文廟再建に寄附し又土田蔵獲を太学に獻して養賢庫の資を贍らす。是れ成均館々人の起原なりと云ふ。六十二歳、大成殿落成し、王に請ひて謁聖の礼を行ふ。爾後、尤も力を諸生教育に用ひ太学大に振ひ、来学者常に数百人。六十四歳卒す。文政と諡せられ、忠肅王六年には文廟に従祀せらる。

今『晦軒集』〔八〕巻を伝ふと雖、太抵『東文選』、『高麗史』、『碑誌』、『益齊集』、『陽村集』等に散見する彼に関する断片的記録を拾蒐せる者に過ぎず、晦軒の学説を知るに由なし。◎(上面：◎「安氏家乗」、『晦軒年譜』／「晦記」「実記」皆載す。但し今『陽村集』を検するに猶発見するに及はず。／洪淵泉の「晦軒実記序文」之を謂ふ。／実記年譜曰「甲辰先生六十二歳。六月、作文論諸生……此一篇、僅出於陽村集。自是東人始知朱子之学。」)

然れども、彼か朱子の書を読み朱子の学説を信奉せる事は、權近の『陽村集』巻□に彼六十二歳、時大成殿再建竣工の砌、製して以て諸生に示せる短文一篇を載す。其内に「仏教は夷狄の教に汙倫常を蔑にす。然るに近来干戈続ける餘、学校衰微汙学者喜ひて仏典を読むに至れり。吾嘗て中国に於て朱晦庵の著述を得て聖人の道を發明す。仲尼の道を学はんと欲せば、先づ朱子の学を学ぶに若くなし。爾今、諸子宜しく朱氏の新書を読みて勉学忽々する勿れ」と言へり。是に拠りて、彼か元都に於て朱氏の新書を得て大に喜び、還りて朱子学を太学諸生に向て勸奨励せることを証すへし。

而して前述の如く、彼か元都に赴きしは、~~忠烈王十五年~~と~~同王~~其の四十七歳と五十六歳の両度なり。而して「安氏家乗」は、彼の朱氏書に接せるを以て第一回赴燕の時の事となす。今仮りに此を以て彼五十六歳第二次赴燕の時に属するも、(高麗史学(家)の権威)李益齊の『櫟翁稗説』前集二に、大徳末即忠烈王晩年に於ける晦軒の高麗学史再興功績を挙げ、続いて權溥・白頤正に及び、白彝齋の(忠宣王に従て)元に赴き留都十年、多く程朱性理の書を求めて還~~れる~~は其の忠肅(宣)王に従へるもの(れり。△⇒上面：△故に彼の帰国は當に忠肅王朝であるへし。)

又權菊齋の『四書集注』の鏤版は『麗史』も

『櫟翁稗説』も俱に其の年代を言はさるも、『櫟翁稗説』は白頤正の学功を記し訖りて後に菊齋鏤版事業を言ひ且つ又年輩閱歴相平權溥は白頤正の後ふ。文意に見て、恐らく白頤正の朱書求還の後に在りとなすへきか、少なくとも其前ならさるへく、況んや晦軒に比しては年輩閱歴、大に後れたれば、朱学首倡の功を晦(軒)と争ふか如きは事(説)を成さず。禹倬に至りては、成均祭酒となりしは忠肅王朝に在り、晦軒に比して一世卅年の後にあり。

されは、晦軒の朱子学倡道か、三人者の何人よりも蚤かりしは、明白にして毫も疑ふへからず。故に予は、寧ろ「家乗」の何等か根拠ありしならん事を想像して、彼か元都より新刊朱子書を寫返りしは、彼四十八歳忠烈王十六年庚寅にして、是年代は現今知得へき範囲に於て朱子学東方伝来の記憶すへき日子なり。

〔元の学界・科举制度〕

朱子学、既に忠烈王・忠肅王朝より高麗に伝来せられ、漸く太学にも講せられしも、何故に朱子学か高麗の正学即官学と立てらるゝに至れるか。此事情を明むるには、當時元の学界並に科举制度を一瞥せざるへからず。

元太宗皇帝〔1229～1245〕は、守成の大業には儒臣を用ひさるへからずとなし、乃ち北元にも儒学を興さんと欲し、俘に交りて南方より来れる朱子学者趙復〔号江漢〕を延きて子弟を教授せしめ、其十年には、太極書院を燕京に建て周濂溪の祠堂をおき、此に二程、張横渠、楊時、游酢及朱子六先正を配享し、宋遺書八千巻を納め、江漢をして書院に居りて其学を講せしむ。時に朱子没後、未だ四十年ならず。

加ふるに、宋末偽学の禁、厳なるしか為、朱子の学、尚北方に行はるゝに至らず。北方の学人、殆ど之を識る者なし。

是に於て江漢、羲・農・堯・舜・孔・顔・孟

(より)以(て)周・張・程・朱に至る「道統図」を製沔以て教ふ。太極書院は北元理学の根源にして、江漢は其初世の夫子なり。彼に受学せる者に許魯齋衡あり。姚樞の推薦に依りて世祖の知遇を得、其八年、集賢殿学士国子祭酒を以て太学の事を幹し、蒙古貴縉子弟を教育し儒礼を以て厳格に陶督す。其十八年、七十三歳を以て卒す。文正と諡せらる。皇慶二年、孔子廟庭に従祀せらる。魯齋に至りて、元の国学の規格成り、朱子学、元国の正学に立てたる。

晦軒か元都に赴きて朱子書を得たる忠烈王十五(六)年は、世祖廿七年(に沔)魯齋没後七春秋、彼の弟子等、師学を紹きて益々之を盛にし、或は大匠として或は巨儒として程朱学を倡道して、道学漸く全元を浸灌せんとする時世なり。従て朱子書の新刊せらるゝもの相踵けるならん。

而沔魯齋の学は『小学』より悟入し『小学』に於て深く自得する所あり。居常学徒に語りて曰く

「小学之書、吾信之如神明、敬之如父母。」『魯齋遺書』

されは、彼の所説も実地の践履と日常格致の工夫に関する者多く、哲学に関する者甚少し。

晦軒、燕京にありて果沔魯齋派の学説を受聞する機会ありしや否やを知らずと雖、前後二回の滞燕中、若干當時元の学者等の力を注ぐ点の那边にあるかを会得せるものありしやと想像せられざるにも非ず。

元朝大儒と称せらるゝ者、魯齋の外、劉静修及吳草廬あり。而沔静修は、魯齋と同時代なるも殆と出て仕へず、其学直隸に及はず。草廬は、魯齋に後るゝこと三十年、且又其学に禅習を交へ、純朱子学に非すとせらる。されは、當時燕都の学は、魯齋派以外には門戸を樹つる者ありと攷へられず。

而沔『麗史』「安珣列伝」によれば、彼の太学

を監するや、子弟の礼儀に就きて責むる所頗る厳格なりと、又人物を評して「莊重安詳、人皆畏敬す」とあり、彼の子弟教育法及其の日常持身の『小学』に則りて礼儀厳格なりしを證す。されは、彼か魯齋学派に属する元の朱子学を承来りしとなすも、何等彼の事蹟と矛盾する所なし。前述忠烈王朝晦軒、太学を復興し朱子新学を此に講し、後進之を継承し朱子学漸く高麗に興るを見たりと雖、其の実に高麗官学となり、苟も挾冊の子弟学へは則朱子学の外なきに至るは、忠肅王以後の事に属すと推定せらる。即『麗史』によれば、忠肅王元年、元朝より使臣を送来りて(其)新定科举に関する詔書を頒ち、王乃ち權漢功を遣し元に赴きて、始めて科举を行ふを賀せしめ、其翌年には、従来東堂試と称せるを改めて應挙試と称することゝし、之に及第せる者より更に三名を試選して元に赴きて其制科に應せしむることになせり。而沔其春正月、朴仁幹等に及第を賜ひ、仁幹等三名を元に遣して應科せしめたり。但し皆第せず。制科及第は、其五年の安震に始まり、其後相次きて崔瀝、安軸、李穀、李仁復、安輔、尹安之、李穡、趙廉、賔于光、(上面：崔彪 [輿覽三十七卷 435p]) 等 十(十)名を伝ふ。

忠肅王元年は即皇慶三年に沔、其前年、仁宗皇帝は、中書省上奏を聴きて愈科举新制施行を決定し、慎重に審議立案せしめ、皇慶三年に至りて全版図に其制を頒布せるなり事は『元史』「選挙志」に詳なり。即當時、元朝版図内の四民族なる蒙古、色(色)目人[外族諸姓・欽察回々等]、漢人[高麗及中国北部人]、南人[中国南部人]を通して共に科举の経義問答にありて朱子注解を用ふることゝし、即『四書』は『集注]、『詩経』は『集伝]、『尚書』は『蔡注]、『周易』は『程伝]及『本義]、『春秋』は『三伝]及『胡氏伝]を用ふることゝし、高麗は女真、契丹及中国北部人と俱に所謂漢人中に編入せら

れたり。

斯くて元朝科制一定し、之を高麗に頒布して其挙子の應試を奨するに至りて、乃ち高麗国試亦自ら之に倣則して經書の解釈を程朱の其に制限し、施きて国学に於ける研經窮理亦悉く朱氏の学を用ふるに至る。

されは、安晦軒の朱子学倡道は、彼か忠烈王朝燕京滞留當時、朱子学の新興に感發せる(に)因る者なるも、彼の首倡か爾後益々忠実に有力に、後進人士に由りて随倡せられ、遂に高麗の儒学か完全に朱子学に依りて統一せられ、以て李朝儒学の源流となりし其実際の原因は、元朝仁宗皇帝の科挙の確定、換言すれば、元朝か朱子学を以て官学と建てしにありと謂はさるへからず。前述白頤正か忠宣王に従て滞燕十年、多く程朱性理書を求めて帰り、又權溥か『四書集注』を繕刻せるは、皆是れ皇慶三年以後の事に属し、畢竟高麗も大元に倣て朱子学を官学と定めしか故に、程朱の書を廉(廣)集し又弘布する必要生し、是必要に應せる者即白・權二氏の事業に涉、其事業は固より高麗に於ける朱子学普及に効ありしなり。『高麗史』列伝の二氏の條に俱に「高麗性理之学、此に開く」と記せるは、之を誇張せるものに外ならざるなり。

〔民の官学と朝鮮の官学〕

序に明朝の官学と李朝の其とを畧説せんに、元滅ひて朱明天下を一統するや、朱子と同姓なるを奇縁として一層朱子及び朱氏の学を尊崇し、元朝科制を踏襲して科程を定む。是事業に参劃せるは、勦業の功臣宋濂其人なり。洪武三年、科挙原則を定め、經明修行博古通今の士を取る。高麗・安南・占城の諸国も之に應することゝし
[[紀事本末]、占城は安南の南部に在り]、洪武十七年に至るや、三年大比の制を確定して詳細に試取の章程を定む。事は『明会典』に詳なり。而して『四書』は『集注』、『易』は『程朱伝義』、

『書』は『蔡伝』及古注疏、『詩』は集伝、『春秋』は三伝の胡氏伝及張洽伝〔朱子弟子著春秋集伝〕、『礼記』は朱注なきか故に古注疏を主とすることゝす。斯くて朱注を経義の主と立つること元朝と異ならず。されは、明朝科制の制定は直に高麗の国学に影響して益々「朱子学に非されは、儒学に非ず」との觀念を鞏固にせること想像するに難からず。

斯くて李朝に至りて明朝との關係、益々緊密となり、事大の誠意、上下に瀰漚するに至りて、李朝成均館の經学も朱子に統一し、闔国の学者朱氏学以外の学を以て異学と指目し揮斥せずんは已まさる、極めて狭隘なる学風となるに至れる所以の淵源、亦実に元明二朝科挙章程にありて存す。清朝となりても科挙の經義は朱注を主となすこと別に變化なし。

但し朝鮮学士の明朝賓興科及第は、恭愍王の廿年に金濤なる者一人を出せるか、爾後絶えて出せず。李朝世宗朝にも是事、朝廷問題となり、永樂年中、請ひて之を回復せんとし挙人まで選定せしか、何故か明朝、之を許さず、事寝めり。

(上面：朱子(学)は、高麗忠烈王朝に善唱(将来)せられ、国末に至り儒者輩出せりと雖、畢竟麗朝の道学は、李朝の道学を呼起さんか為の豫備時代に過ぎず。朝鮮に於て真の所謂道学の盛なるに至れるは、即李朝に至りてなり。)

〔朝鮮儒学の三期区分〕

朝鮮(李朝)の儒学は之を三期に分ちて観るを得へし。高麗李朝国初より宣祖朝李退溪以前迄は第一期にして、李退溪より肅宗朝宋尤庵以前迄は第二期、而して宋尤庵より国末迄は即第三期なり。

第一期にありては、麗末李初と相(の儒学を)承けて太学を中心として朱子学を以て官学と立て、他方、仏教の教化上に於ける積世の勢力を日に月に奪収して単一儒教、換言すれば、朱子

教の国家及社会となすべく進めり。而して此期間
~~は高麗は国祚既に傾きて之を支柱すべき方法なく~~
~~李朝は~~（の初期には）国家猶物業建設の時期
を去ること遠からず。従て儒者も或は憂国の志
~~士たり或は殉国の士となり或は創業の功臣たり~~
鄭夢周鄭道傳、趙浚、河崙等を以て代表し得る
か如く、主として学問上の所得をは政治上に施
行せんとする者にして、謂はゞ儒学本領を経綸
の一面に在りとなす者なり。従て朱子哲学の精
奥たる理気・心性・窮理・持敬に付ては、未だ
充分に之を闡明して領得するには至らず。故に
之を儒者とは称すへきも、未だ以て道学者とは
称すへからず。

（稍降りて）~~勿論其の間には~~（明宗朝）李晦
齊の如き、徐花潭の如き、沈潜窮理し工夫して
道学の原理に一隻眼を開きし者若干ありしと雖、
花潭は其學術尚粗雑にして、其の説く所、論理
的に明晰に（なる能はず。又）修辭に於ても学
的なること能はず。晦齊は文章、暢達明通、前
後比類少しと雖、一生の大部分を内外の官職に
費せるを以て静思潜研の遑に乏しく、又門戸を
開きて子弟を取りて道緒を後世に伝ふるの余裕
少く、畢竟其生涯は官人と称すべく、道学者と
称するは當らず。

されは、是期の（尤適當なる）代表者には、
中宗朝一時純真の儒者政治を施きて三年ならさ
るに失脚して己卯士禍で惨死せる趙静庵に求め
ざるへからず。前述李晦齊、亦静庵に類する経
歴を有す。彼等二人者は、必ずしも名利を求め
し儒者には非すと雖、（猶）其学問の立場、事功
派に属するか故に、一旦時を失へば、世と相乖
きて末路悲惨に終れるなり。

然るに、李退溪に至るに及びて、初め尋常士
流の家庭の習俗に従て科挙に應して官場の人とな
りしと雖、最初より中宗己卯の士禍の静庵、
明宗乙巳の士禍の晦齊の悲惨なる前例に鑑みて、
深く此世の實際か純真なる儒者政治を行ふには

あまりに事情複雑にして人心陰險なるを悟り、
又儒者の真事業は、学業中途にして朝廷に出
てゝ治人の地位に即くことよりは、修養の功を
極めて内省して自己の境涯か古人と大差なきを
認むるを得る地位に迄到達し、且又其修養の必
要をは今人及後人に伝ふるを以て、一層醇正に
して貴き意義ありと信し、乃ち専ら辞退不出を
以て處身の方針となし、一生を捧けて道学の究
明に委せり。

此に至りて、李朝儒者の型式一変して、彼の
事功派以外にあく迄山林にありて蔵修する道学
者の出現を見るに至り、従て学問研究の最適最
高處も京城市闈よりも山秀水清にして静謐なる
田園山林に移るに至り、而して（退溪は能く）程
朱理学の蘊奥、即理気心性の高遠深遠なる学理
を徹底的に究明し、遂に朝鮮道学の発達をして
其絶頂に到達せしめたり。

畧同時に、退溪に對して朝鮮の二大儒宗と称
せらるゝ李栗谷あり。宰相の~~李幹~~（器）あり、
経綸の才に於て古今に卓越すと称せらる。而して
栗谷か学者として名あるは、其理学上の研究か
退溪の進める所迄進りて、而して退溪に對し別
個の理気論を立てしに因るなり。故に栗谷、退
溪と相並ひて朝鮮儒学発達の双頂峯をなす。

二氏以前は、此の頂上に到る迄の上り道なり。
二氏以後は、頂上と山腹との間を或は上り或は
下る往来なり。斯くて是期間には、二氏を中心
として儒学者輩出し、或は事功に或は道学に絢
爛として李朝學術の黄金時代を現出す。

栗谷の生存時、既に朝臣二党に分れんとし、
彼極力之を調停せんとして力及はず。其死後、
益々朋党の分裂明瞭となり。光海君を歴、仁祖
の世となり、丙子の役清朝に屈服し、次て孝宗
立つや、大明国の為の国讐と其瀋陽に囚るゝし
間の私怨とを報せんか為に、実際的には無謀な
るも道学的には所謂春秋大義を伸ふる所、討清
の空想を抱くに至り、其説に共鳴する~~山林~~（當

代)の夫(宿)儒宋尤庵を抜擢して日夜謀議を凝らし、尤庵は、山林の一道学先生を以て一躍して孝宗の顧問となり水魚の誼を締す。彼は西人なり。之と對抗して勢力を競はんとする政党に東人あり、絶えず諍議を惹起す。而して其の諍議の題目となれるに礼論と経義の解釈とあり、尤庵等の礼論経義は、其師たる西人の学者(栗谷の弟子たる)金沙溪・慎獨齋父子に受け、之に反対する尹白湖、許眉叟等は東人中の南人に属す。南人は栗谷の学説に絶対反対す。

是に至りて、礼論及経義の争論も其(争ふる)真動機は政権争闘に在るも、兎に角相争ふ所の表面の題目は此にあるか故に、乃ち学説と政党と結付くに至るなり。尤庵は、南人の学祖退溪の理気説に向て反駁を試み、其結果、遡りて朱子言論の其物に及ひて朱子言論の時と場合に由りて異同あるを究め『朱子言論同異攷』(の)著(に着手す)。之に對して南人は、益々主理の退溪説を固執して、西人の学祖李栗谷の主氣に陥り葱嶺〔パミール高原=仏教〕の氣を帯ふるを攻撃す。遂に朝鮮の儒学界に主理・主氣の二大派を生し、礼論と相俟ちて政党と学派の結合を成し、以て今日に至れり。

(上面:李建昌『明美堂集』卷十一「原論」は、朝鮮朋党の根原を論じ遡源究流、尤精覈となす。彼は之に八大原を列举す。道学太重、名義太嚴、文辞太繁、刑獄太密、台閣太峻、官職太清、閥閥太盛、承平太久、是也。其官職太清の条に曰く／「士禍者、小人之害士類、固其宜也。党論則士類自相争也。同一士類而何為其相争哉。其必有所以争之之資矣、道学与官職是已。争道学者一則争官職者十、道学之党百則官職之党千。非道学之重則無以為官職之宗主、非官職之清則無以為道学之声援。此其勢交相為内外而無〔衍字〕得失。成敗亦未嘗不交相為終始焉。)」

されは、李朝儒学第三期は、宋尤庵を以て代表し、他の無数の学者は、或は之を隨倡し、或

は之に反対して其位地を作れる者なり。而して彼と反対派と相主張して譲らざる所の学説に至りては、大要退・栗二氏思想の外に出でざるなり。朱子学派の外に異学の行はるゝに至れる、亦此期の特色となさるゝへからす。

王陽明の学は、既に退溪の當時『伝習録』と共に朝鮮に伝来せるも、其説朱子派と齟齬するか故に、退溪先づ力を尽して之を揮斥し、爾来士類にして公然之を研究し之を奉する者なかりしか、(尤庵以後)西人中、老・少論二派分裂するや、少論派の学人者好みて之を治むる者あり。後、老論・少論、相劇争し、竟に老論制勝、少論劣者となるや、老論に反抗意識より施きて官学に反抗意識を生し、其派の名門子弟にして陰に王学を治め之を好む者、少からす。而して此か先をなす者を肅宗英祖の朝鄭齊斗となす。

更に世改降るや、所謂西学即ち天主教、在清宣教師よりして輸入せられ、南人の名家にして之を悦ぶ者輩出し、他方、清朝乾隆文化の爛熟は、自然に朝鮮学人の此に對する興味と尊敬とを喚起し、清朝朱子学と合わさる清朝の經学、及唐宋詩文に對して別個の風神を具ふる清朝の詩文、亦漸く往燕の朝鮮学人を通して朝鮮に将来せられ、又地理・天文・算学も、在清宣教師の著述に由りて稍々に輸入せられ、既に天主教の勢、都鄙に蔓延するや、此に儒教側より斥邪の主張、猛然として発し、遂に純祖・憲宗及李太王の初季の教獄を煉成す。

されは、第三期に至れば、朱子学の思想信仰上の統一的權威、實際に稍や^{かたむ}灰きて、異学異教の私に奉せらるゝを見るゝに至れりと謂ふへし。

第一章 朱子学

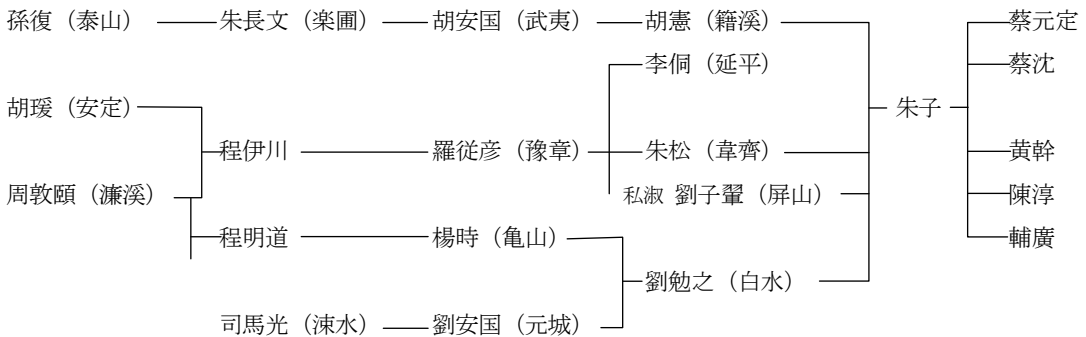
朝鮮(儒学)に於ける異学を説く前に當り、其正学たる朱子学に就て若干説述して其の大体の概念を得明にせざるへからす。

宋学、若くは理学、又は道学と称せれるゝ宋代の儒学は、先秦・漢・魏・六朝・唐代の諸歴代思想の綜合の上に構成せられし者にして、之を批評的に分晰すれば、(古) 儒教思想の外、又道教及仏教思想をも含有する者なることは、先輩の既に詳説細述する所にして更に反復の要なし。而して吾か朱子は、又宋代(儒) 学の集大成者なり。故に仮りに朱子を主として説を成せば、朱子以前の支那思想は、朱子を出す為の素地を作る者とも謂ふを得へし。(実に) 学者として、家数の大なる其後世思想界に與へし影

響の絶対なる、古来、朱子に匹敵する者あらず。殊に其の思想的影響の純一無雜にして長期に亘りて変らさりしは、朝鮮思想学術界の朱子学に由る統一に軼くる者あらず。

朝鮮の儒学史は、単に之を朱子学派の一支流と視做して毫も差支なし。但し今は時短く功忙しく、朱子学の委曲に亘りて講述する能はず。主として朱子学とは如何なる学なるかを、殊に朝鮮儒学と関係深き部分に就て概説するゝに止めんとす。

朱子学系



朱子の生涯

宋の国家は、神宗朝、王安石の新法実施に因りて、朝廷に新・舊両党派の對立を生せる以来、国勢漸く振はず。遂に北方に窟起り南下し、遼を亡して宋に逼れる金を防ぐこと能はず。欽宗元年には、其都汴京〔河南省〕陥落し、欽宗亦捉へらる。宗室南奔し、高宗八年、都を浙江の臨安に奠り爾後、南宋となる。

朱子は、高宗建炎四年九月十五日〔西曆 1130〕延平尤溪縣毓秀峰下鄭氏の家に生る〔今の福建省〕。而して彼の祖先は世々徽州婺源縣の萬安郷松岩里〔今安徽省〕に住し、徽州は晋時の新安なるか故に彼は常に自ら新安の人と称せり。

父、松、字は喬年、章齊と號す。羅豫章に従

学し進士に登第せるか、既に汙宰相秦檜と合はず、官を辞して上記鄭氏の家に寓し、此に彼を生む。母は祝氏。

彼の名は熹、字は元晦又は仲晦、晦菴、晦翁、雲谷先人、滄洲、病叟、遯翁等は其號なり。考亭と云ふは地名なり。

五歳入学し穎悟非常。十四歳、父章齊逝く。病重きや彼を顧みて「吾の死後、當に往きて籍溪の胡原仲、白水の劉致中、屏山の劉彦仲に師事すへし。三人皆吾友にして其学問淵源あり」と。彼、其言に従ふ。劉致中、尤彼を器とし、妻はずに其息女を以てす。然れども彼か真に為学の道を授けられしは後十年、延平李侗に従遊するに至りてなり。

十九歳春、進士に及第し、二十二歳春、同安県主簿を授けられ、廿四歳、將に同安県に赴かんとして其夏始めて往きて李延平に受学す。延平、絶称して偉器となす。爾後、暇あれば往きて謁して質義請益す。故に後世、延平を以て朱子の師となし、学統を彼に序ふ。廿八歳、同安の任を罷めて帰り、事親講学を以て事となす。

孝宗位に即くに及び、金の勢益盛なり、帝直言を求む。朱子、「壬午応詔封事」を上りて帝王の学不可不講、攘夷の策不可不決行を述ぶ。然れど其後、召命に応せず、専ら退き著述に従事す。淳熙二年、呂東萊の来訪を受け、之と学を寒泉精舎に講し、共に『近思録』を編次し、東萊を送りて鷺湖に至り。此に陸象山兄弟と会し學術を論難する所ありしも、遂に合はすして止む。五年、知南康軍〔総理郡政事〕に除せられ、力を民事に用ひ、民力休養を図り、民悦服す。孝宗、本と朱子を尊敬し大に之を用ひしとする意ありしも、宰相王淮、権臣唐仲友、鄭丙等と合はず。唐仲友は前に朱子の為に弾劾せられし者なり。十五年、王淮相を罷め、朱子乃ち入奏し五劄を上りて時弊を痛論し、又有名なる「戊申封事」を上りて、補翼太子・選任大臣・振挙綱維・変化風俗・愛養民力・修明軍政の六条を進言す。孝宗、大に感動す。而して遂に権臣の為に沮まれて大に用ふること能はず。

孝宗内禅して光宗即位し、朱子六十歳、知漳州に拜せられて就任し、大に治績あり。既にして光宗病て寧宗之に代るや、亦夙に朱子の学徳を欽慕し侍講に拜す。然るに、寧宗即位の際、定策の功ありし皇太后〔即孝宗の後〕韓氏の親戚たる侂胄なる者、功を恃みて専横なるに、朱子、夙に其人物を洞察し、屢帝に向て其の重任すべからざるを進言せるか為に、韓侂胄に忌まれ、韓党の小人等、頻に誣奏をなして朱子の学問人物を攻撃し、以て偽学の魁となす。中には劉三傑の如く「朱子は叛逆を謀るの準備をなしつゝ

ある。宜しく斬に處すべし」と迄極言する者あり。斯くて所謂偽学党に名を列する者、五十九人に上る。既にして朱子、官職を削られ、其首弟子蔡元定は道州に流さる。

されは、彼の門下にして特立して顧みざる者は丘壑に屏息（伏）し、怯懦なる者は、名を他門に改め、師門を過きても入らざるに至る。『朱子文集』卷五十三「答劉季章」に曰く

「禮書、此数日来、方得下手、已整頓得十餘篇。但無人抄寫為撓。蓋可借人處皆畏偽学之汚染而不肯借其力。可以相助者、皆在遠而不副近急、不免雇人寫。但費用不饒、無以奉此費耳。」

而して此間にありて、朱子は学を竹林精舎に講し、著作を怠らず。慶元五年三月、病みて歿す。年七十一。朱子其晩年は、頗る健康を害し大患に罹り、病餘双目殆と失明し、其歿時には進退の自由をも失へり。

而して朱子卒後七年、韓侂胄、誅に伏し偽学の禁漸く緩む。次帝理宗に至りて程朱学復盛なり。侂胄伏誅の翌年嘉定元年には諡を文と賜ひ、理宗の宝慶三年には太師を贈られ、信国公に封せられ、更に紹定三年には改めて徽国公に封せらる。淳祐元年、文廟に従享せらる。

朱子の著述に富むと、古来比肩する者少なし。而して其中、尤心を用ひしは『四書』の注釈に在り、朱子学問の骨髓、殆と収めて此にありと謂ふべく、『大学』『論語』如きは更定数、四に及び、『大学』誠意章は、其絶筆なりと云ふ。朱子歿後、門人『朱子語類』百卷、『朱子文集』百廿一卷を編纂す。

学説

朱子の如き偉大なる学者の学説は、極めて多方面にして之を純粹哲学と観、之を實踐哲学として観、之を経学として観、乃至之を政治經濟即經綸の学として観るも、各々優に一巻の書を成すべし。況や其文学に至りては、其の文其の詩、全

支那を通して卓然と汙大家に伍す。然れども今は、其朝鮮の儒学に影響を与へたる点に重を〔お〕きて説かんとするが故に、純粹哲学に於ける理氣説と実践哲学に於ける心性論とを主として、旁ら修養説と経綸説とに説及はんとす。

a 〔一〕 理氣説

理概念（氣は宋学の宇宙觀に於ける二大原理にシテ）、理は条理、法則、形式等の概念に由りて構成せられ、氣概念は元氣、活動、物質等の概念によりて構成せらる。（畢竟宇宙をは生々不息の一大活動体と視て、其の活動に一定の條理法則ある方面を理と稱し、其の活動其物を氣と稱する也。）

朱子の理氣説は、程伊川に承けたる者なるも、伊川は、宇宙本体として理氣の二元を立て理を重し、人性を論するに至りては善の源をは此におき氣に惡種をおけりと雖、猶未た本体論的に理と氣とを判然二物と分ちて而シテ理を以て一層根本的なりとなすに至らざりしなり。

蓋し同じく理氣二元論を立するも、単に並立二元論にして、二元の間、先後源派の區別なく、同時に生し相待ちて存在すとなす觀方もあり、又二元論を立し乍ら活動を主と觀るか為に、氣を以て一層根本的と立て、氣の活動に従て理現ると見るもあり、更に第三には、理を以て一層根本的にして理先つあり、其の実現の資料として氣生し来ると觀るもあり。

朱子は此の三者の内、果して何れを採れるか、是れ古來學者の間に説の一致あるを見ず。詳言すれば、朱子を以て第一の理氣説なりとなす者と第二の理氣説なりとなす者と第三の理氣説なりとなす者との三派あり。而シテ予自身は、実に彼が第三の理氣説なることを確信する者なり。朝鮮儒學者に在りても、李退溪は余と同意見にして、李栗谷は則第一説なりとなす。別に後世には第二説なりとなす者亦あり。而シテ是の朱子

學說根本觀の相違は、施きて心性論修養論に至りて亦無限の差違を生ず。故に（先つ）此處に向て所觀を確實にせざるへからず。

朱子か第一の理氣説を取りし如く惟做るゝ所の文字は『朱子文集』及『語類』に其の例、決して乏しからざるは否むへからず。例へは『語類』第一に

「理未嘗離乎氣。天下未嘗無理、亦未嘗無氣之理、氣以成形理亦賦焉。」

とあり、又『文集』卷四十一「答楊子直書」に「五行陰陽、陰陽太極、則非太極之後、別生二五、二五之先有太極也。〔太極是理、陰陽是氣〕×（上面左脇：×又第二説を採りしと惟はるゝ言論は、『易學啓蒙』を主とし、本圖書第一に／「天地之間、一氣而已。分而為二、則為陰陽而五行、造化萬物、始終無不管於是焉。」□⇒下面左脇：□とあり、又「答袁機仲別幅」に／「蓋天地之間、一氣而已。分陰分陽、便是兩物。」と云ふ。又明作録〔壬子以後所聞朱子六十三〕には◎⇒下面右脇：◎「天地只是一氣、便自分陰陽。緣有陰陽二氣相成、化生萬物。」／他に猶あり。）

とあるか如し。

朱子の如き大家數にして著述に豊富なる人にありては、固より場合に應じて多様の思想の發表を見るは當然なり。是点を闡明せる者前述（朝鮮孝宗朝）宋尤庵、其弟子（權）寒水齋、又其弟子韓南塘の三代に汙業を訖へし『朱子言論同異攷』あり。然れども、朱子の最深き思索に出たりと觀るへき晩年の説に於て細玩するに、理氣二元對立以上に汙りて觀念上、理を以て氣に先立ちて存在し、氣に先ちて現れざるへからずと断せるは、『語類』及『文集』に於て其例、少からず。

『語類』卷一游敬仲所聞〔辛亥年に汙朱子庚申年朱子卒するか故に卒前九年〕

「先有箇天理了、却有氣。氣積而為質、而性具

焉。」

「有是理、後生是氣。」

又丁巳〔卒前三年〕以後の所聞に係かる林夔孫の所録に

「問、理与氣。曰、有是理、便有是氣。但理是本。」

とあり、又『文集』「答楊志仁」に

「有是理後、方有此理〔氣の誤記〕。既有是氣、然後此理有安頓處。」

とあるか如く、一々枚挙に違あらず。

此に朝鮮学者の説を付て検討するに、(前述)『朱子言論同異攷』の著者韓南塘〔元震〕は、其第一「理氣」項に在りて綜合的に汙大處に徹せる見を立て、曰く

「朱子所論、理氣性命、其說不一。而要皆有所指、實相貫通者、前已論之。今又各舉其統一二段以發其例、推類求之、則餘可盡通矣。理氣以流行言、則本無先後。以本原言、則理先而氣後。以稟賦言、則氣先理後。」

蓋し萬物を覆載する此天地を、本体論的に窮極に徹して觀すれば、生々の大作用を運営する所の無始より無終に亘る無限の流行即活動に外ならず、必しも理氣二元を分觀するを要せず。既に是れ無限の流行なるか故に、前後の時間的分別の概念を容れず。理氣は異物にあらず、又先後もなし。一個の生々流行に就て其の**善**法則ある方面を指して理と稱し、活動方面を指して氣と稱するに過ぎざるなり。

更に又転汙、眼前歴々として認識せらるゝ具體的天地萬物の存在に即して言へば、認識の客体としての萬物個々の存在は、形質を以て第一次的概念となす。各形質ありて然後、各々其性を稟賦せらると謂はざるへからず、形質の稟賦なくして性のみを有する物の存在は、全体的世界にありては認容すへからされはなり。人物の形質生して然後に、其性現るとなさゝるへからず。

然るに、理氣二元の觀念を極度に推拡しつゝ更に歸一を要求する、人類思攷の本性に従て思辨し、仮りに太初源頭、若くは萬有の根源本体と云ふ概念を許容する時は、初より宇宙活動の法則と資料とか同時に成立して一々の活動となると觀るべきか？將又資料先に存して(全体的に)活動する裡に法則現はるとなすべきか？將又先つ法則打立てられ、其法則の軌迹に隨順して合理的に資料か取運はれて以て活動を具現すとなすべきか？朱子は、此に第三の觀念を扱ひて、氣の運行は理を以て本となすとなせりと謂ふなり。

更に細説すれば、大天地の流行活動と云ふ無限の鑽をは、仮りに之を中截して鑽の一環を初頭となして攷ふる時は、其初頭の一環か**繼**(第二)の環と結著けられ、更に第三第四と無限の環と結著けらるゝ前に、全鑽を一貫する所の計画の存在を許さゝるへからず。此の計画存在するか故に、之に循て一環は他環に他環は更に又他環に順次に結著けられて、此に長き**一**鑽を形成するなり。其の計画は即是れ理に外ならず。故に本体論より言へば、理を以て氣より一層根本的に汙、而汙氣の先に理ありとなさゝるへからず。

朱子「答趙致道書」に曰く

「蓋理為氣之宰而氣為理之形体。凡物之生、必先有所以生之理、而氣聚以成質、理亦隨以具、故微分前後耳。」

又『語類』卷七十五に曰く

「如易有太極、是生兩儀、則先從實理處說。若論其生、則俱生、太極依舊在陰陽裏。但言次序、須有這**繼**(理)、方始有陰陽也。」

又

「其理則一。雖然、自見在事物而觀之、則陰陽涵太極。推其本、則太極生陰陽。」

是即朱子理氣論の終極を説明せる所の者にして、前例に引當てゝ言へば、鑽の各環の接合に

は豫め一定の計画ありて然後、之に循て各環か接合せられて具体的鎖を形成するなり。其計画こそ即尤根本的な一元の理にして、各環は即気なり。即理実現の資料たるに外ならず。而して斯く各環か循環的に接合せられて完成せる所の一個の鎖其物に就て、計画其物か歴然として実現する者にして、理の當体を気の形作る所の鎖以外に求觀んとするも、到底不可能なり。故に朱子の理の觀念には二様あることを注意せざるへからず。一は本源の一理の意味にして、他は形質に即して実現する所の理の意味なり。理か気を主宰すと言ふは、本原の理の意味に於てのみ之を謂ふを得べきものなり。

理 [本元的] — 氣 — 理 [即氣／實現的]

故に本原の理を看得ざる者は、或は気を以て理の先となし、或は二元並立となす。而して兩者共に朱子の本意に非ざるなり。

二、心性情論

理氣論より降りて心性情論に移る。

~~前述~~ (由来) ~~の如く~~ 支那思想にありては、大宇宙の本体論及現象論の原理は、其の儘、人の心に向ても亦本体論的及現象論の原理なりとなす。故に朱子学に在りては、人の心に亦理氣二元を立て、理を以て(氣より)一層根本的に、能く気を主宰し得るものとなす。

天の賦命を稟受して人生す。人の本来天より得て生れし者を性と謂ふ。『朱子語類』卷五賀孫の録に朱子の

「性則、就其全体而萬物所得以為生者、言之。」と説ける者即是なり。故に性は即原本の生れ付なり。生れ付の意義、本と身心両面を含むを當然とす。形色を離れて人の生付を想像すへからされはなり。故に『孟子』は尽心章に於て「形色、天性也」と云へり。

然るに朱子に至りては、性を以て理体となす。理体なるか故に形色の概念を容れず。是に於てか人の本性は、形氣概念を伴ふ以上の者となる。即天は唯理体を降して以て人の性となし、其の性更に形氣を得て全体化して始めて人となる。是時、天は氣 [魂] 即元氣、地は質 [魄] を與ふと攷へられ、固より有形的天地の意なり。是れ前述、宇宙觀理氣論に於て、本原の理と、氣を得ての実現の理とあると同一思想なり。是に於て源本に溯れば、萬人の性皆同じく、単に人のみならず、物亦其本性に於ては人と異なることなし、と言はざるを得ざるに至る。『朱子学的』に「人々有一太極、物々有一太極。合而言之、萬物体一統一^{せられ}太極^に。分而言之、一物各具一太極也。」

故に人々心の~~相~~ (異) ること面の異なる如く、人物の性情不同なるは、本性か形氣と合せる後の事に属す。人は本性の理を通して本来天と一体なり。

斯くて朱子の人生觀に於ては、天命の性迄は是れ形氣以上なり。単に觀念として之を立すへきのみ。觀念として立すと雖、其の理なる以上、氣と合して具体的性となるや、具体的性の内包的法則として其一切作用の条理紀綱となる。是を理か気を主宰すと謂ひ、而して其の条理紀綱は吾人には當然~~必然~~と受取らる。其~~絶対的不可抗的なるか故なり~~。

理の氣と合して具体的性となるに至りて、千差萬別なり。氣質の性、是なり。氣質の性其物に即しては、本然の性の面目は全部之を認むること能はず。然れども、理と氣との(両)概念を精密に分晰すれば、氣質性中に於ける本然性の作用を認識するに難からず。『朱子語類』卷四道夫録 [己酉以後所聞]

「論天地之性、則專指理言、論氣質之性、則以理與氣雜而言之。未有此氣、已有此性。氣有不存而性却常在。雖其方在氣中、然氣自是氣、性

自是性、亦不相夾雜。至論其偏體於物、無處不在、則又不論氣之精粗、莫不有是理。」

と云ふ者、即二者區別を明にす。

氣質の性は、身心両面に跨りて識を有す。其外界に感して動く精神作用を情と称す。故に性は体に_レ情は用なり。性と情とを包含して能く動静を統制し調整し、認識の主体となる者を称して心となす。故に心とは覺と統覺と自覺とを兼ての称なり。

朱子か程・張に継きて「心兼性情（理氣）統性情」と謂ふ者なり。されは、氣質の性を変化して性初に復らしむる修養の原理は、心の存在或は心を立する事に依りて始めて成立するものとす。心に就て更に志と意とを立つ。志は心の_レ之く所にして、意は當為謀度して以て志を遂げんとする者、皆心の働なり。

是に於て本然の性、即心中に宿る純粹理体は、単に観念的にのみ存在を許すべく、終に人の体験内には入来らざる者なるかの問題起らざるを得ず。『中庸』「喜怒哀樂之未發謂之中」の註に「喜怒哀樂、情也。其未發則性也。無所偏倚、故謂之中〔非無過不及也〕——大本者、天命之性。天下之理、由此出、道之体也。〔無所偏倚、則喜怒哀樂未起也。〕」

是註は、喜怒哀樂未だ發せず、所謂氣質の性の体に於て体験する所の寂然不動、殆と生の欲動を止息せる精神状態は、略本然の性の姿其物に外ならず。故に未發の状態にありては、論理上、聖・凡異あるへからず。但た凡人は、純粹未發の境地に到得さるのみとなす。『朱子語類』卷六十二淳緑に

「或曰、恐衆人於未發、昏了否。曰、這裡未有昏明、須是還他做未發、若論原頭未發都一般。」と云へり。

是に於て本然性の体段、亦略体験界の事となる故に、本然性は氣質性に對して別に存在するには非ず、但た氣質性内の理を指_レ謂ふに外な

らず。夫れ本然性は、但た氣質性の理を謂ふなり。而_レ汙理は（単に）形式的法則に_レ汙自ら能く具体的活動を営む能はされは、其か所謂發動して精神的活動を構成する_レは、既に氣と結合せる後にして、即氣質の性なり。故に氣質の性の純粹観念的体、即生の欲動の静止の状態にありては、略ほ本然性の面目を現すと謂ふへし。勿論嚴格に言へは、此場合にも氣と結合せる性の静止状態なるか故に、純粹理体~~なる~~（にして）観念的存在なる本然性とは全然同一なりとは謂ふ能はさるなり。然れども、彼の（復性を完成せる）聖人の氣質性は略本然性其物なりとの論法を用ひて、寂然不動、喜怒哀樂未發の状態の体験の裡に本然性の面目窺ふへしと謂ふなり。（右脇：起信論）

四〔三〕、修養論

修養論は道德論より始まる。

道は、人の本然性に率_レ從（ひ）行く所の路にして、人に個に其天然の性の裡に此道を履み行くへき資格を具備す。故に道とは客観的には理の実現、主観的には性の実現と謂ふへし。

朱子は、本然性をは理と立て、更に詳しく道德的に説明して、仁を総名とする仁義礼智の四徳となす。仁とは天地生物の徳を享けて愛の理、心の徳なり。人として心に四徳を備へさるなきは、『孟子』の証明せる如く、（其の端緒~~たる~~）四端の情の皆天然に現る_レに就て疑ふへからず。此の意味に於て朱子亦性善説なり。即『孟子』の四端の条の注釈の如く、四情を端緒として性の四徳なることを知るへしとなすなり。

既に情の自然の流出か四端なれば、人の惡種を何所に求むへき。必ず之を本然性以外に向て求めさるへからず。即氣質の裡に向て求めさるへからず。故に修養とは、理の主宰的機能を確認にして、以て氣質の性の偏倚を変化して、以て性初に復る所の工夫及実践、即是れなり。而

汙是任に當るは、心なること勿論なり。故に復性は朱子修養論の堂奥なり。『朱子外集』「仁説」に曰く

「未発之前、四徳具焉、而惟仁則包乎四者——已発之際、四端著焉。而惟惻隱則貫乎四端。」〔故に四端即本性之発也。〕

朱子修養論は、之を分ちて窮理〔又為学〕と持守〔又居敬〕の二項となり。而汙共に知識して而汙実行することを仮定す。但し是二綱領は、伊川の「涵養須用敬、進学則在致知」に原き之を紹述せるに外ならず。朱子の「答呂伯恭書」に伊川の此の兩語を評して

「兩言雖約、其实入徳之門、無踰於此。」と云へり。

蓋し窮理とは、心を以て外界物理を究明するものにして、居敬とは、我心中の理を自ら明にするなり。心か主一〔動時〕無適〔静時〕の状態にある場合に尤能く理の現はるゝか故なり。

窮理即学問の要は、格物致知にあり、格物致知は、窮理の方法なり。(広く事物の)理を究明して惑はさるに至れば、則凡天下の事に就きて義利・公私・軽重・先後の辨あり。然と汙明白なるを得、之く所皆道に合す。而汙理は、独り心の中に先天性として備はるのみならず、外物に亦条理として存在す。故に物に就て其理を究格するに従て、心中(の理)亦実現す。所謂物理、究むること一寸なれば、心中の理亦長すること一寸なる者、即是なり。換言すれば、形式として備はるゝ心中の理か、外界物理を得て内容を与へられて乃具現するなり。而汙物理を窮めて已ますんは、遂に一旦豁然と汙貫通するの日あり、物を究め尽せば、知亦其極に到るなり。

但し此の場合、一般事物(の理)に亘りて貫通するか如く説做るれども、実は人事に関する方面を重注し、之を主とする意味に解すへきなり。而汙知は先、行は後なるも、人学ひて能く真に知り深く究むるに至れば、自ら行に迄進まさる

能はず。故に朱子は『学的』に

「学之一事〔字の誤記〕、実兼致知力行而言。」と云へり。故に知る所をは力めて行ふに到らされは、学へりと謂ふ能はさる也。

朱子は、王陽明の如く知行合一とは説做さるも、能く之を知る者は能く之を行ふことを得ることは、之を承認せりとなさゝるへからず。而汙知と行との中間に体験〔体認〕の一階程をおき、窮理読書の要は、只た文字の看を成すへからず、切己体験を要すと高調力説す〔『語類』卷一及卷一一〕。故に「少看熟読、反覆体験」と云ふ。朱子か読書を以て窮理の最要法となすは、書中、古聖賢の窮理の迹、歴然と汙存するか故に之を辿れば、自ら古聖賢に導かれて事物の深理を悟るを得るか故也。

持守又は居敬は、之を静時の存養と動時の省察とに分つ。而汙敬の工夫を以て之を一貫す。

敬とは、『論語』学而章集注に伊川の説を引き「主一無適」と解し、主一とは只是心專一の意、即動時の敬、無適とは只是不走作の意、即静時の敬なり。故に持敬すれば、動静を貫きて心の作用分裂せさるか故に心中の理尤分明なりとなす。

存養無適の境は即未発の中、是なり。是時、本然性、即心中本全の理体、略歴然と汙其の當体現はる。存養の二字は所謂放心を収め了して、心をして其在るへき所にあらしめ、其無限の妙用を方寸に斂めて発せさる状態なり。換言すれば、純粹主観の當体なる境涯なり。既に猶未た客観のあるあらず。故に鬼神も之を窺ふ能はずと称す。(右脇：心能見、心所見)

但し持敬存養は、(之を)敬ふ以て存養すと解せば、以心観心の誤謬に陥る。故に朱子は特に居敬と称す。身心其の刹那に一枚の敬となるの謂なり。朱子か静坐を説くは、存養の為なり。但し朱子は、静坐を以て単に外物を遮断して入定するのみの謂にあらず、静裡に精神思慮を整

齊して、以て動時の事物に應ずる素地をなすへしとなし、此に動静の間の聯絡を成す。

朱子の静坐には、更に進一步の深義ありて、以て養未発之中体認本性の実践となし、禪宗の坐禪と相通する者あるを忘るへからず。人若し此の静裡居敬の工夫に熟して、動時に當りても亦此の居敬の心態を以て萬事に應ずるときは、所謂誠心にして心の全部の働か一事に集注せられて、其人と汙最善を竭すこととなる。詳言すれば、喜怒哀楽の偏倚を超越せる昭朗の全一心を以て萬事に應ずるなり。

動時の居敬は、之を省察と称す。省察とは、心動きて行為に移らんとするとき、精密に其動機を省みて（其の）人心即形氣より発するか、其の道心即（道）義より発するかを察し、本心の正を守りて離れざるを謂ふなり。

而して茲に朱子か悪の種子を形氣におきて而して復性説を立するに至れる所以を尋ねざるへからず。（右脇：仏教）朱子は、何故に悪の種を理に在らずして氣に在りとなすか。勿論、氣其物は本来不可無の物なり。此なければ、人間生せず、又生活する能はされは也。而して猶此物の為の故に人間界の悪の種、生するは何故ぞ。

朱子の「答蔡季通書」は、恐らく朱子の氣と悪とに對する最後の思索なるべく、是以上の説明は朱子に求むる能はざるなり。曰く

「人之有生、性与氣合而已。然即其已合而析言之、則性主乎理而無形、氣主乎形而有質。以其主理而無形、故公而無不善、以其公而善也、故其發皆天理之所行。以其私而或不善也、故其發皆人欲之所作。此舜之戒禹、所以有人心道心之別。」（右脇：衆別、無差別）

条理明白、説得て一点の僮侗なし。即公と私とを以て理と氣との本質を区別し、公私より人心道心を演繹し出せばなり。

（故に）朱子の善の最後の標準は公に在り、公私より又利義之辨の思想出つ。凡て為にする

所ありて而して汙為すを利と謂ひ、為にする所なくして為すを義と謂ふ。即亦公私の辨と同義なり。利義の辨は、孟子先に之を倡へて、宋儒後に之を承く。君子と小人との区別は、専ら其心術の執著する所の、利にあるか、義にあるかに因りて判断すへし。是れ儒教道義觀、千古の断案にして、亦動機論の發展に外ならず。省察の工夫は、慎独を説くに至りて極まる。

五〔四〕、政治論

朱子の政治論は、儒教の正統政治論、即政体として民本主義の君主専制を認め、人君が能く賢人を採用し、萬民の為に利を興し害を去るを以て政治要諦となる。従て格別新味を見す。

但し當時宋朝末、内外に亘りて政治紀綱、弛緩し、動もすれば、奸小跋扈する患あり。故に彼は屢次上書し、治道の大本は紀綱を立るにありと論し、又紀綱を立つるには人君の心術を正しうし賢材を信任するにありと述ふ。朱子か斯く治道の根本を「正君心」〔又格君心〕におきしは、朝鮮学者の政治論及政治の實際に影響する所の甚大にして、朝鮮の官制に於て玉堂（及言官）か最清要官職となり、又特任經筵官か最名誉ある任用たりしも、亦此に其原因をおく。

朱子は『春秋』に於て胡安国の説を採りて、周室を大一統と立て他姓の代りて王となるを否定し、又胡漢の別を竣別して、胡の中華を侵すを以て容すへからざる変事となす。是点、正に公羊派と絶対相容れず。公羊学派は『春秋』（右脇：！！）の紀年を以て周を尊ぶに非ず、又魯を王とするにもあらず、実は新王を仮設するなりとなす。故に朱子は、南宋の国是を修政事と攘夷狄の二事に外ならずと叫ぶ〔『朱子文集』十一壬午応詔封事〕。是説、又朝鮮に伝はりて、仁祖降清以後、儒者の輿論公議となり、以て甲午年〔1894〕に迄及ぶ。朱子学説の梗概、此に畢る。

〔朱子以後の儒学：三学派〕 第二章

上来畧説せる如く、朱子は、支那思想の最大なる綜合者として、儒教の外に又道・釈二氏よりも其の採るべき所は之を採り、排すべき所は之を排し、以て渾然たる儒教哲学の一大体系を組織せるなり。されば、朱子以後の儒学は、當然三派の鼎立を将来するの外なかるべき形勢となるに至れり。

即其一派は、純粹朱子学の繼承祖述、即是に洵、元・明・清三朝、科制にありて朱子の經書注釈を以て挙子を試みしか如く、言はゞ官学派とも稱すべき学派なり。

其二は、朱子か道・釈二教、殊に禅学及華嚴学（起信論）より取来れる思想の極めて多きに拘らず、猶力めて之に似しことを避けんか為に、物心兩立を許して格物致知双修を法となし、為に学説及実践共に支離緩慢無力に流れ、結局物理に局して心當体に即する直截端的の工夫に缺き、修養法として力的なること禅宗に及はず。是欠点を見て、乃ち此に別に一派を立てゞ一層多く禅学の工夫を取入れて、以て朱子学の未だ説到らず行ひ到らざる所に達せんとする者に洵、即「存徳性」、「心即理」を主張する朱子同時代の陸象山より更に転進して「致良知」、「心外無物」を主張する明の王陽明となれる一派、是なり。

其三は、朱子か道・釈を取入れて（其）儒学を組織せるか故に、其の所説は実は孔子の正学に非すとなし、朱子の治めて未だ充分ならざりし古典の科学的史学的攷勘に依りて正しく孔子の思想を闡明せんとする所の明末の黄梨洲、顧亭林、顔習齊等あり（出て）（より）清朝の至りて極盛に達せる樸学、即漢学派なり。

されば、第二・第三学派の辨難の對象とする所は、自ら朱子其人の学説に在り。而洵彼等の辨難に由りて朱子学か動揺せるか否かは学者の各看る所に任さらさるへからず。

第二章 朝鮮儒学第一期に於ける異学

前述の如く朝鮮儒学の第一期、即李退溪出現以前に於ては、猶朱子学の知識、精透徹底、魚の水にありて水を忘るゝ如くなるに到らず。従て学者の朱子学者としての顯正破邪の両方面も、亦猶其の整備嚴格の域に到らず。学者其の好む所に従て、朱子以外の学者の説を採りて之を唱道し、知らず識らず、異学に陥るも少からず。

而洵（稍）後れて李退溪出て（顛撲不倒）精透なる（醇）朱子学者の立場より、之を批判して其朱子の正意を得ざるを指摘するに至りて、遂に其学説の權威を失墜し、後世復た公然之を祖述する者なきに至る。若し退溪の嚴正批判の加へらるゝなく、彼等異学派の学説亦一派の説として唱道し講説するを許されならば、朝鮮の儒学界は猶幾分か単調に陥るを防ぎて思想の自由を見るを得たりしなるへし。

従て、第一期に於ける異学派に属する者も、必しも朱子学説に對して異説を唱道せんとする成心ありて之を唱へしとは観るへからず。唯た（彼等は）朱子の学説よりも寧ろ之を好むか故に之を唱道せりと謂ふ程度に過ぎず。而洵彼等か朱子学よりも此を好み之を擇ふと云ふは、彼等か朱子学の知識の猶十全ならざるの致す所なりと、李退溪等は觀察するなるか、其实多方之に原因するも評す（争ふ）へからず。

而して他方に於ては、當時の学界の猶後世程、朱子学帰依か固（執）僻ならず。従て学风亦固陋ならざるか故に、彼等の異学唱道に對して之を異学と指斥して之を抑へんと試みさりし事も、之を後世と比較して注意すべき点なりと謂はざるへからず。而洵此亦當時の学界一般の朱子学に對する知識の水準の後世程の高度に達せず、又政争猶激化せず、政争（党）と学派と結著くに至らざりし等、諸原因の此に存在することを忘るへからず。

されは真個の異学、換言すれば（既に）朱子学説の完全なる理解を得つゝ而も或は（反）朱子学派の著述に由りて感発し、或は自己の研鑽に原きて朱子の学説に對して或は部分的に或は全面的に賛成することなく、反りて朱子学を反對の對象として異学を唱道するに至れるは、第三期に至りて始めて之を見る。

一、徐花潭¹

〔一、事蹟〕

第一期に於ける異学派の学者として、先づ叙すへきは、徐花潭なり。彼の先輩李晦齋彦迪も『大学』一書の解釈に在りて、朱子と峻（峻）異なる見解を立て、『大学章句補遺』の一書を著し、後世にも影響を與へしと雖、晦齋は其の（儒）学の学説の大本に於て朱子と毫も異なる所あら~~ず~~（さるは）、彼の名著「太極問辨」の證示する所の如し。されは、晦齋の『大学』解釈は、後第三期種々の異学派の学者を述へ其の朱子と異なる『大学』解釈を立てしを述ふる時、畧之を説及することゝし、彼を異学派の一人として挙ぐることなし。

中宗朝、一時大に信用せられ、多数の同志を率ゐて廟堂に立ち、純粹儒者政治を布~~ける~~（き、三年に~~て~~失脚して刑死せる己卯の名賢）趙静庵の師、金寒喧堂宏弼の門に李延慶灘叟あり、静庵と尤親善なり。己卯の土禍に際し、幸に中宗の親知ありしに依りて毒手を免れ、退きて忠州龍灘上の草戸に閑居し、陰厓李稔と相往來す。而~~して~~其聲譽京洛を動かし、従学者少からず。就中官途に於て成功せる者に蘇齋盧守慎あり、又従弟李瀾慶、李俊慶も俱に彼に従遊し、皆大官に到る。

灘叟門、一異才出す。徐敬徳花潭、即是なり。

花潭の学、専ら自得に出つと稱すと雖、亦灘叟に依りて入学の~~途~~（路）を得たりと伝ふ。但し『東国文献録』及具義書〔(1861~1951) 取調局委員・中樞院副贊議・朝鮮国書解題事務担任『海東名家尺牘』1914〕氏は、花潭の嘗て晦齋に従遊せりと云ふ。或は面謁、義理を質せる事ありしか。

花潭は晦齋と相並ひて、退溪以前の二大学者に推すへし。而~~して~~其門派の振へること及其学説の後世に影響を與へし事の大なる、寧ろ晦齋の寂寞たるに軼くと謂ふへし。李栗谷は退溪に比~~して~~（すれば）、花潭を推尊して其の学風独犢的なるを稱す。嘗て曰く

「道学、自趙静庵始起、至退陶先生、儒者模様已成矣。然退陶似遵行聖賢言語者而不見其有自見處、花潭則有所見而見其一隅者也。〔『栗谷全書』語録〕

栗谷は晦齋を尊はす。花潭は、朱子学全盛に~~て~~極めて単調に陥れる李朝儒学界にありて、張横渠説に淵源して太虚気一元説を唱道せるは、盧蘇齋の羅整庵の学説を取りて、気を理より一層根本的原理なりと立てると、相並ひて一異彩を放つ者と謂はさるへからず。

徐敬徳、字は可久、花潭は其號、又復齋とも號す。松都の人。唐城〔今の南陽〕の徐氏代々豊徳に家す。父修義、松都の韓氏を娶りて開城に移り、花潭を此に生む。成宗廿年なり。

幼より異質あり、窮理考究を好む。十八歳『大学』を読み「格物致知」の語に至り歎~~して~~曰く「学を為すには格物を先にせさるへからず」と。乃ち一室に独坐して、己か心を以て師となし、以て天下の理を窮めんとす。例へは、天の理を窮めんとすれば、壁に天字を貼して對坐黙思、数日屢々寢食を廢するに至るか如し。如是こと数年。

廿歳頃、窮思過度、疾を成し身を戸外に運する能はず。乃驚きて巻を积て、各道の名山に遊

¹ 高橋亨の最初朝鮮儒学研究論文が「徐花潭」『哲学雑誌』26-296、明治44年である。

ふこと一年に沔疾全く瘳ゆ、爾来山水の癖を生し、終年山水の佳所に逢へは立ちて舞へりと云ふ。既に沔家に回り復た格物窮理を積むこと三年。即前後六年にして天下の物理究格せざるなきも、尚真理の端的に於て一膜を隔るの感あるを免れず。更に『四書』『五経』『性理大全』等を玩閲して終に豁然と沔契する所あり、聖賢の微旨深意、鑿々として貫通す。是に至りて学成る。

花潭天性、名利を厭ふ。学成りて依然村閭の一窮夫。家貧に沔往々数日の烟を絶つ。而沔夷然たり。学名漸く伝はり、従学の士、三々五々来る。彼教へて倦ます、其材を成さしむ。郷党亦其大儒たるを知り、相戒めて其の行誼に倣ひ、争辨あるも官に赴かずして彼に詣りて決を仰くに至る。

中宗己卯、松都に賢良科を設くるや、府の彼を薦むれど、辞沔赴かず。後中宗辛卯、母命に由りて不得已京城に赴きて司馬試に應し及第す。爾後終身應科せず。

中宗末年、急病を得、或は死せんことを慮り、前人未発と信する「原理氣」、「理氣説」、「太虚説」を草して後に遺す。既に沔疾瘳ゆ、明宗元年七月味爽、花潭の書齋に逝く。享年五十七。易簣に臨み、一門人問て曰く「先生今日意思果沔什麼」と。彼答へて曰く「死生の理之を知ること已に久し意思安し」と。松都の士庶、訃を聞きて来哭する者相踵く。

彼歿して聲誉益隆、又門人の清要に列する者少からず。明宗早く吏曹正郎を贈り、歿後卅年宣祖八年、門人朴淳、許曄、朴民獻等の請に依りて大匡輔国崇祿大夫議政府右議政兼領經筵春秋館事を追贈し、文康と諡し、朴民獻神道碑を製す。光海君元年、開城炭岷門外に花谷書院を建て享祀し、配するに門人思庵朴淳、草堂許曄、習静閔純を以てす。甲寅額を賜はり、外に開城の崧陽書院に鄭圃隱に配享せらる。

花潭、眉宇明快に沔眼、曙星の如く、容貌高古、衣冠嚴整なり。後世彼を異人化し、種々神怪なる逸事を伝ふ。悉く信するに足らず。唯た『牛溪集』に曰く、牛溪一日花潭の舊居を尋ねたるに既に荒廢沔往迹復た識り難し。花潭の上一茅屋に一老婢の住するを見、之に問へは則花潭の舊婢なりと。老婢為に語りて曰く

「先生之歿、在丙午七月。當病革時、会侍者、昇出譚上漫浴而還、食頃乃卒。渾問、何為是澡浴乎。答曰、賢者之歿、必須如此、乃正絡之義也。渾与習之〔安敏學、廣州人、僉正、号楓崖〕相【第一冊終／第二冊始】咨嗟以為小婢猶聞此義。流風余韻信乎、猶可激也。」

亦一佳話となすへし。花潭の臨死、泰然と沔神氣喪へざる異常の完力ありしを証す。

彼の交友、多からず、只た慕齋金安國は頗る彼に推服し屢々彼に物を贈り、又彼を参奉に推挙せり。此當代の山林儒たる成運、曹植等も相評の間柄なりしか如し。

彼の家、本と貧、彼又生業を治めず、為に屢空し、彼夷然、琅に書を講して輟めず。弟子若くは市人、其窮を聞きて米塩を送来るあれば、亦拒まず、『花潭集』中間に弟子の衣及米を贈る来るを喜ぶの詩あり。彼の生涯は清淡閑通、殆と禅侶道家の趣あり、性格の高古標致清逸なる彼の如きは、李朝学者中、比類多からずとなす。

二、学説

花潭の学説は、其の著『花潭集』の外、弟子朴淳の『思菴集』、朴民獻の撰する「神道碑文」にも若干断片的に散見す。而沔畧同時代の学者退溪・栗谷諸氏亦屢々之を批評せり。而沔前述の如く、栗谷は花潭の学の見地の高きを称すれど、退溪は、終始以て朱子学の正脈を逸せりとなし、動もすれば、視るに異学を以てす。是れ退・栗二氏の学説及学風の相違より来る所の批判の相違なり。『花潭集』は早く支那に伝はり『四

庫全書』〔集部三十一〕に編入せらる。

宣祖朝に至り、弟子朴淳・朴曄等、師の為に官位の追贈を請ふや、宣祖花潭の学に就て栗谷に下問せらる。栗谷答へて曰く

「敬徳之学、出於横渠。其所著書、若謂之洽合聖賢之旨、〔則〕臣不知也。〔但世之所謂學者、只依倣聖賢之説以爲言、中心多無所得。敬徳則〕深思遠旨、多自得之妙、非文字言語之妙也。〔『石潭日記』〕

然るに、退溪は花潭を評して

「花潭、其質似朴而実誕、其学似高而実駁。其論理氣處、出入連累、全不分曉。」〔『退溪集』〕

此に花潭の学一面に當れり。花潭門人恥齋洪仁祐〔亦出入退門〕嘗て曰く

「花潭、大概其学不自卑近踐履而向倣上地達去。他苦心極思、積力累年、知識開透。故説理精通、尤善於易。他氣質、沈静而粹美也。」

是れ、退溪の評を以て、誕となし雜攷となす学風を成すに至る一原因なり。

花潭自身亦実に其の為学の道程の変則なりしを挙言して

「吾少也、不得賢師、枉費工夫。学者不得倣某工夫。」

と云へり。

彼は、李灘叟に問道せりと伝ふと雖、其学、本と自得に成る。独力精思窮格して所謂道の本体、即一切現象の根本原理を諦認し、翻りて聖賢の文字に垂（檢）して其の信解の正しきを証せるなり。故に其の学、其出发点より已に独創的なり。されは、終に爛漫と汙宋儒の説に同帰すと雖、自ら一道独自の見解の閃めきなきに非ず。是れ学問の独創を重する栗谷か、李朝儒者中、花潭を以て特に自見ありとなす所以にして、同時に徹頭徹尾、朱子を祖述する退溪か花潭を異学視し、終に

「嘗試以花潭説、揆諸聖賢説、無一符合處。」

〔『退溪先生文集』卷之四十一雜著「非理氣爲一物辯證」〕

と極言するに至る所以なり。

今伝はる『花潭集』は僅に三卷にして文字数も幾許もなし。且其半は詩文の閑、葛藤なく、彼の学説は本書に依りて其の片鱗を現すのみ。

一〔1〕. 太虚

〔印の意味不明〕前述の如く朱子の理氣論は、理を以て一層根本的なりとなす理氣二元論なり。然るに花潭は、其の覃思精究の結果、更に進みて理氣未判以前の一源に溯するに至りて、遂に朱子に就かず、反りて横渠の太虚説を以て其意を得たりとなし。遂に宇宙一元氣説を倡道し、朝鮮に於て始めて主氣説を立するに至る。但し其の論説方法、極めて簡に汙又肆、退溪等正當朱子学派の絮説剖析、歩一步、論旨を進むる学究的なるか如くならず。

花潭は、宇宙の（真の）一元を称す太虚と謂ふ。太虚は、淡然無形にして其大外に出つること能はず、其初は始なく、其来處を究むること能はず、其の終る處なし。宇宙萬物一切、太虚より生して太虚内に存在し、又太虚中に没す。されは、宇宙何處に之くも太虚ならざる所なく、全宇宙是れ一枚の太虚なりに汙空隙なし。然れども太虚は、之を手執らんとすれば、手に執ること能はず。何となれば、手に執り得る所の者は、即物象に汙太虚其物ならされはなり。されども、手に執る能はざるか故に、太虚即無なりとは謂ふ能はず。何となれば、一々物象は皆太虚を以て其本体となさざるを得されはなり〔原理氣〕。

斯くて花潭は、宇宙全体を以て一太虚に外ならずとなす。然らば、太虚なる者は之を氣となすへきか、將た之を理となすへきか。換言すれば、活動の根源を以て其活動する物の形質の素となすへきか、將た其の活動に表はるゝ形式的法則となすへきか。彼は、張横渠の説に従て、太虚は即氣なりとなす。

案するに、横渠・朱子の理気説、共に『易』
「係辞伝」

「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八
卦、八卦定吉凶、吉凶生大業。」

を原となす。「八卦生吉凶」以下は、『易』の本
体論では直に占筮の理に応用せるものなるも、
別に又「生々之謂易」、「天地之大徳曰生」の語
あるに因りて、是語か又太極活動の一原より萬
物生々して不息なるをも意味することを知るへ
し。既に太極を以て天地活動の一元となす。然
則太極、是理か、是気か。『易』に「一陰一陽之
謂道」と謂て、太極の活動には一陰一陽即動静
生剋の一定法則ありて、其法則を道と立て太極
即道の根原なるか故に、理を主として太極を理
体と観るは、即朱子なり。

されども、活動は即元氣 [エネルギー] の作用に
行元氣即気なり。気の動くに従て其處に一定法
則顕現す。未だ動かさる以前、換言すれば、理
の未だ現れざる以前の太極は之を氣と観るを以
て妥當なりとなすは、横渠なり。理気未判以前、
無限活動を含みて未だ動出さる當体即太極に
行太虚なり。斯くて太虚説成立し、氣を以て理
よりは一層根本的なる太初一元となし、而行同
時に気あれば、便ち理を具ふと謂ふ。詳言すれ
ば、論理的には、気は理より以前の一元に於て、
具体的には気あれば即同時に理具るとなす。

花潭は、太虚の即気なるを説明して
「太虚々而不虚、虚即气、虚無窮無外、气亦無
窮無外。」

と云へり。されは、太虚なる者は、宇宙太初に
行宇宙と共に窮まる所なし。然らば、彼は何故
に太初即物如を称行太虚と謂へるか。換言すれ
ば、大宇宙を総括して之を太虚と命せるか。恐
らく彼は、横渠と同じく老子の虚無の思想に基
き、萬有を發生し萬物を包蔵し無限の生々活動
の中心となり、永遠の不増不減なる者は之を絶
對虚と命名するを尤適當と攷へしなるへし。

彼は「原理氣」篇に於て、先人の物如實在に
関する諸種の命名を列举して、其畢竟皆太虚に
行を意味するに外ならざるを言へり。されども、
彼は又太虚の觀念をは老子の虚無と混するは不
可なりと云ふ。何となれば、老子は無を以て萬
物の原として萬物は無より生ずとなし、虚実有
無を以て相對的觀念となす。然るに、我か太虚
は有無の區別を超越す。其儘に於て其中に無限
の有を含み、又無限の実を蔵し、一切萬物は太
虚の内に於て生滅すればなり。若し太虚を以て
無なりとせば、無より有を生じ又無より氣を生
ずるの矛盾に陥るを免れず。

2. 理氣

花潭は、太虚物如より如何にして眼前歴々の
萬象か發生し来りしかを究理して理氣二元説に
到達せり。而行彼の理氣説亦畢竟、『易』の陰陽
論以外に出ること能はず。太虚は元氣なるか故
に當然活動せざるへからず、而行其の活動や動
静生剋（左脇：水生木、木生火、火生土、土生
金、金生水。水克火、火克金、金克木、木克土、
土克水）と行現はるゝ所の一陰一陽の方式を取
らざるへからず。是に至りて乃理の表現する時
となる。而行什麼なる時、什麼なる處に於て、
太虚か活動行一陰一陽するや、彼は之を機と称
す。何物も此をして然らしむるあらずと云ふ。

「原理氣」に曰く

「倏爾躍、忽爾闢、孰使之乎。自能爾也、亦自
不得不爾、是謂理之時也。易所謂感而遂通、庸
所謂道自道、周所謂太極動而生陽者也。不能無
動靜、無闢闢。其何故哉。機自爾也。」

即太虚、元氣一元よりして天地萬物の生に發
出するは、太虚の倏爾として躍り、忽爾として
闢く所の活動に依り、是活動は氣自ら然らざる
を得ざる所の者、即機にして、是に至りて理の
表し来る時となる。

されは、太虚か動静開闢を開始せざる以前は、

淡然渾然たる一氣のみに之を先天と称す。先験界の意味なり。元氣動きて氣化を始めて此に後天即經驗界に移りて萬象発出するに至りては、動靜開闔生克の法則、井然と紊れず。是れ即宇宙の理なり。爾後は理氣相依存し、氣なきの理、理なきの氣なる者あることなし。

「理者、氣之宰也。所謂宰、非自外来而宰之。指其氣之用事、能不失所以然之正者而謂之。」

是に至りて、花潭と朱子とは理氣の先・後天に付き、全く相正反す。朱子に在りては、理は先天にして理氣相用ふるは後天なり、氣は畢竟理を実現する為の具体的資料たるに外ならず。然るに花潭にありては、氣こそ即先天に之を理氣相用ふるは反りて後天なり、氣の活動に即して理の現るゝに外ならず。而して既に後天となりては、花潭も理を以て形質なき条理にして氣を主宰して道理を履（に循）行かしむる者となし、朱子と全く相契合し、学問の要は窮理実践にありとなす。故に花潭の朱子を尊崇することは、爾他李朝学者に譲らず。嘗て「[朴] 頤正字詞」に朱子を頌して

「洙泗心学、濂洛其嗣、拡前啓後、莫盛乎予朱子、紹述群聖、搜極源委、説不虛生、挙経踐履、明掲学的、以示来裔、是可以依帰、日星仰止。」と云へり。

3. 氣聚散

天地萬物は、太虚一元の氣より発生し来る。而して一元の氣動きて一陰一陽を以て萬物に変展する情状を最総合的に著すもの、陽にありては之を鼓と謂ひ、陰にありては之を聚と謂ふ。鼓するの極は其の氣軽くして騰りて天となり、聚の極は其の氣重くして降りて地となる。然れども、天の中にも日は陽の精、月は陰の精なり、星辰に亦陰陽あり。地にありても火は陽の極に之、水は陰の極なり。斯く天の中、地の中にありても鼓聚の二作用の結へる所の陰陽ありと雖、総

括して之を言へば、天は陽氣に之を鼓騰りて性となし、地は陰氣に之を聚降りて性となす。鼓は動なり、聚は静なり。

是に於て、花潭は一種の天地儀を案出し、謂へらく「天は常に鼓動して旋轉して已ます。其の中間に當りて天に包られて地、横はり常に静にして降らんとす。天の騰上せんとする力と地の降下せんとする力と相平均するか故に、天と地とは終古太虚中に懸りて安定し、天は乾々として地の周囲に旋轉す」と。彼の天地の位地及運行に関する觀念は、本と朱子に基き、頗る幼稚なりと雖、地の位地の安定するは、天と地との力の平均に依ると思索せるは、神來の妙ありと謂はざるべからず。

一元氣鼓聚する所の陰陽的作用に由りて天地剖判し、更に地上に於て細蘊と之を萬物無限に発生す。花潭は、地か天の輕清なるに對して固定的形質なると同じく、萬物は地に對して固定的性質なりと視るべしとなす。換言すれば、地氣即五行が聚りて以て一々の個体を発生するなり。故に太虚が聚りて具体的天地となると同様に地氣が聚りて萬物となる。

4. 氣質不滅及死生論

花潭の萬物の化生を太虚の聚に因るとなす思想は、總て物質不滅を演繹し出す。何となれば、萬物皆一氣の凝聚なるか故に、其形質を構成するもの、太虚の外、何物もなく、太虚は即實在に之の本より不生不滅なればなり。仮令、現象的には其形質滅ひたる如しと雖、是れ単に太虚の聚散の變化のみなり。太虚を以て淡然渾然不可執の氣體と想像すれば、滅ひたる如き物は、寧ろ其本体に還元したる者となすべし。花潭が氣散となす所以なり。されば、花潭より言へば、氣には聚散あるのみにして有無あることなし。換言すれば、物質は不滅なり。故に人物も（と）鬼神とは畢竟、氣の聚散に因る所の状態の變化

に外ならず。彼の「鬼神死生説」に曰く

「死生人鬼、只是氣之聚散而已。有聚散而無有無。氣之本体、然矣。氣之淡一清虛者、游漫無外之虛。聚之大者為天地、聚之小者、無萬物、聚散之勢有微著久遠耳。」

更に思索を進むれば、此の現象的天地、亦所謂後天に属する者なるか故に、天地其物は、現象的に滅亡することなきに非ず。されども、今の天地は滅尽すれども、天地の一元たる太虚氣は永劫に毫も増減せず。従て滅尽せる如くに見ゆる今の天地、亦本体的には決して滅尽せるには非ざるなり。花潭は猶是の意を充分に説出さゝりしか、~~此~~（彼の）学説の影響を受けし李栗谷に至りて明瞭に之を道破せり。

花潭に「有物吟」二章²ありて萬物の畢竟不滅なるを歌へり。

既に氣の聚散ありて有無生滅はなし。故に死生の議に至りても、唯た形の変化を認めて眞の生出と死滅とは之を認めず。寧ろ淡然たる太虚の氣即物如なるか故に、此の肉体の変して無形に歸するか如きは、先天の本元に復歸せる者と謂ふを得へし。

但し花潭は、人の死亡に於て、其の靈魂と形魄の二部分~~との~~（の各）異なる歸所を認めたり。即形魄は、肉体を組織する五行の解体するに従て、同じく散して地の五行に歸すれども、靈魂は、元と無形質なる靈氣にして、太虚淡一清虚なる部分の凝りて成れる者なるか故に、形魄の離散するや、靈魂は之と共に地の五行に復歸することなく、昇揚して清虚なる虚空に返る。例へば、香を焚くに、其の形質は灰となりて原質を留めず遂に地に歸するに、香氣は留まりて暫く散せざるか如し。又之を鬼神~~と~~稱す。陰陽二氣の最靈妙なる所なればなり。

花潭は、是意味に於て靈魂の或限度の不滅を

承認し、先人の祭祀を重するを以て其の所以ありとなす。但し個人の靈魂か何時迄も其の墳塋に留まり、~~直接~~子孫の家の祠堂に往来するか如きは~~は之を~~（事を）信（せりとは）なりとなすへからず。

花潭か萬物の太虚~~との~~への皈元はありて眞の死滅はなしとなすは、横渠の「太和」篇の思想に基く。横渠曰く

「太虚、不能無氣。氣不能不聚而為萬物。萬物不能不散而為太虚。」

是点、横渠は朱子と相異なる。朱子は、萬物の死滅を以て其氣の眞の滅尽となす。『朱子語類』に

「問、魂氣升るは于天に、莫只是消散に汙、其實無物歸于天上否。曰、也是氣散、只是氣散³、只是才散便無。如火將滅、也有烟上、只是便散。」と云へり。

物質及靈魂の不滅に付きて、栗谷は、花潭と其見を異にし、花潭を以て「認氣為理」ものとなす。李退溪亦常に同様の批評をなす。即栗谷は、永遠不易なるは宇宙の理にして氣にはあらず。故に個体的形質を構成する氣は天地の無限なる生出にして、其個体的聚結の縁尽きて解散するとき、其個体的存在を喪失し、其形質は過去の者となりて滅尽し、更に新なる生出、之に続く。宇宙元氣は間断なく萬物を生出するも、萬物より觀れば、新あり舊あり過去あり未来あり現在あり。元氣は永遠なる川の流の如し、而して個体形質は川の水の如し、絶えず舊水去りて新水来る。但し川に即して現はるゝ所の理に至りては、水の新舊に論なく、永遠に不変なり。花潭は実に氣を認めて理となす弊ありと。

然れども、花潭も其の「鬼神生死論」に言へるか如く、個体的形魄の散滅は之を肯定し、独り淡一清虚なる元氣の不滅なるを言ふのみ。但し

² 『花潭先生文集』卷之一「有物」に「有物來來不盡來、來纔盡處又從來。來來本自來無始、爲問君初何所來。」と二「有物歸歸不盡歸、歸纔盡處未曾歸。歸歸到底歸無了、爲問君從何所歸。」とある。

³ 「只是氣散」の四字は、『朱子語類』に無い。削除忘れであろう。

形魄の氣、其物も畢竟太虚一元より出る者に汙即地の五行の結聚なり。而汙形魄散すれば、再度地の五行に還元するか故に、之を個体的に観るに非れば、形魄の氣と雖、眞の滅尽には非ざるなり。故に花潭の思想より言へば、氣の不滅を説くも何等矛盾なし。但し彼の説理の方式、餘りに簡約にして學術的叙述の体を具へず、其の意を邀へて之を解釈するに非されば、其の眞義を諒解するに困難なり。

但し宋儒の鬼神説其物も論理的不徹底あるを免れず。二程・横渠・朱子共に鬼神なる靈魂的存在は之を否定し、只た鬼は即屈、神は即伸に汙、陰陽二氣の作用たる屈伸の良能を抽象せる概念に外ならず。従てあらゆる鬼神は皆一様なり。人死して鬼神となるとは、人の形質を構成する二素の無形の良能に帰元するの意にして、個人的靈魂か永久に存在すると云ふ思想にはあらず。然るに、宋儒は何れも父祖の靈魂不滅を仮定する祭祀を非常に重して、孝子孝孫の誠意は能く父祖の亡靈に感通する者あり〔少くも天子七代、通常人五代〕。此處宋儒の鬼神説亦論理的徹底を欠く。

されど惟ふに、宋儒は、学的には鬼神を二氣の良能とは認むれど、其の自然的良能は、個体形質の変化に由りて活滅する者に非ざるか故に、普遍的概念と汙個体の氣魄は、鬼神となりて不滅なりと言ふを得へし。既に全人類皆鬼神となる者とすれば、孝子孝孫か父祖を祭りて追遠報本の誠を致すも、必しも迷信と汙排すへきに非ざるなり。以て善良なる風俗を奨め道德の基礎を立するを得へきか故なり。

花潭は、横渠太虚説の外、邵康節の數理学を悦び沈潜、之を窮格し遂に之に精通し、宇宙の理數の外に出てすとなし、就て述ふる所多し。今之を解する能はず、後世亦之を解する者なし。彼の數理学は彼一身に止まる。然れど、朝鮮の學者に汙邵子の數理学を解せるは、花潭あるの

みと稱せらる。

5. 道德及修養

花潭か道と認むる所の者は、天地の自然の淡然静虚に則るにあるか故に、人も力めて無欲に汙虚なる心を以て静閑なる生活を営み、以て是道を履踐すへしとなせり。彼は自ら己の居を評汙瀟洒、仙居に類すと云ひ、又好みて朱子の施註せる魏伯陽の「參同契」を読みたり。即彼は、人能く虚静の天真を養へば、道其中にありて天地の自然に合し、萬事に応汙置碍なしと信し、稍や道家の趣あり。是れ人或は、彼を朝鮮丹学派、仙家者流に編入する所以なり。

花潭は、一般宋儒の如く性善説なり。淡一静虚の靈氣の鍾まりて生せる人の本性に惡のあるへき筈はなし。彼は天稟の性を以て仁義となせり。而汙是性動きて情となるや、或は其正を失ふことあり。此に至りて凡・聖の岐る故に、事に當りて善く思へば其性を尽すを得。思ふと思はさるとは怠・敬の分るゝ所、所謂思へば惟れ聖、思はされは惟れ狂なり。心静なれば、性蔽はれず、惡念由りて起る所なし。静裡に養得たる所を以て動に應すれば、期せずして道に契す故に、彼の修養の要訣は括りて静の一字に在り。彼は平常人を教ふるに當りて主静の工夫に付て啓發する所多し。

されば、彼の文藻にも往々心地の静虚裡より詠出せられしと思はるゝ者あり。詞句の巧以外に能く俗氣を洗除して人をして其の高風を欽せしむ。花潭の「山居」を詠するに曰く

「花潭一草廬、瀟洒類仙居、山簇開軒面、泉鉉咽枕廬。洞幽風淡蕩、境僻樹扶疎、中有逍遙子、清朝好讀書。」

又嘗て其の閑境涯を詠して

「花洞煙霞趁步深、柳源何用枉探尋、自從喫得閑中味、壺裡乾坤認在心。」

彼の栖遲の處、花潭は開城より天磨山に登る

数里の所にあり。天磨山の密林を縫て流下る溪水、合沓川となり、花岩に至りて滙沓数歩の淵となる。今其の厓上、逝斯亭を建つ。彼の舊居の址なりと云ふ。仰きて天磨の空翠を眺め、俯沓花潭の黝蒼を鑑すへし。惟ふに此地、枕上の溪聲、中夜の潭月共に高人の静を修するに足りしならん。

花潭門人の重なる者、閔純、李之菡、朴淳、朴枝華、鍾城令球、朴民獻、南彦經、許擘、鄭介清、朴洞、洪仁祐、洪聖民等なり。

二、盧蘇齋

退溪の當時、之と相並ひて学者ある者、京城に蘆蘇齋あり、慶南に曹南冥あり。然れども、後、年所を経るに従て、漸く其の朝鮮儒学史に於ける重要さを失ひ、終に月前の星の如く専ら退溪一人輝くに至れり。然れども、退溪の醇朱子学なるに對して異学を倡道せるして屈せさりし者として、蘇齋の氣力と所得の境涯とか偉いとせざるへからず。

1. 畧蹟

蘆守愼、字は寡悔、號は蘇齋、又伊齋、別に又暗室先生と號す。光州の人。中宗十年乙亥生る。十七歳、李灘叟の門に遊び、終に其の婿となる。

甲午年、司馬試に合格し、大学に入り厲精、等流に抜く。廿七歳の時、李晦齋を京城に訪ひ『心經』に付て質疑し、存心の要を問ふ。晦齋其の掌を指沓曰く「此に一物あり。握れば破れ握らされは亡ふ」と。彼、恍然と沓契する所あり、爾來晦齋を尊信沓一生衰へず、『晦齋集』にも序を冕す。翌年癸卯、文科に連魁し玉堂に列し（賜暇）書を湖堂に読む。是時、退溪亦湖堂

に在り、往来同学、相共に道義を講磨す。

仁宗即位するや、司諫院正言を以て、新に大臣に任せられし李芑の（心術）奸邪、宰相の地に處らしむへからずと劾し、罷めしむ。芑、深く銜む所あり、明宗即位し尹元衡と共に政權を執り乙巳の大獄を鍊成するや、彼亦削職せられ、在島十九年、尹元衡失脚迄に至る。

彼の珍島に在るや、三間の茅屋に扁沓蘇齋と謂ふ。朱子の語に「我讀我書、如病得蘇」に取れるなり。彼の静坐潜心、日夜聖賢の書を究め、学大に進む。彼の詩は佶倔聳牙、澁晦なるも古氣を帯ひ、骨力聳秀、沈鬱蒼老、唐詩の精神を体得す。謫裏一飯、君を忘れず、其の諷詠する所の誠忱、言表に溢れ、一章伝はる毎に京師の士林、伝誦して歎賞せざるなし。陳南塘の「夙興夕寐箴」の注解、『字訓』及『童蒙須知』の註釈、「人心道心辨」、「執中説」等の彼の著述は、皆謫裏の作に係る。

珍島、本と海中の一弧境、風俗猶麤荒、婚姻の儀の如き媒酌を通せず、腕力以て處女を奪ふ蛮風行はる。彼諄々として導くに天理人紀を以てし、漸く其の風を絶つ。又其の学譽、京郷を動すに至りて、百里負笈、従学する者少からず。珍島民の伶俐なる者来り謁し、徳化全島に及ふ。彼死するや、島民祠沓祭り、視るに聖人を以てす。李朝末年、茂亨先生〔鄭萬朝 1858～1936 姜瑋門人〕亦此地に配せらるゝし十二年⁴、島民猶蘇齋を呼ぶに聖人を以てするに駭けりと云ふ。

五十歳蒙恩、槐山に徙され、翌々年宣祖即位するや、放宥せられ、次て同門に沓姻戚なる李俊慶の薦に依りて再召されて玉堂校理に除せらる。京城の市民、其来るを迎へて大賢出つとなす。爾後七年に沓癸酉年には大臣となり、乙丑年迄前後十六年相府を出てす、李朝有数の大臣と称せらる。

⁴ 鄭萬朝 1858～1936、姜瑋門人。1895年、乙未事變関連で流配、1907年、ハーグ事件後赦免。

既に沔朝論分れて東西二派對立せんとするや、彼は不偏不党の地位を失はさりしと雖、其知友東人に多く自然東人に接近し、恰も李栗谷と正反對に、東人の色彩に染まるを免れざるに至れり。而沔己丑年十月~~癸~~（其の）前に推挙さる鄭汝立の謀叛の獄煉成せらるゝや、西人は以て局面転開の好時機となし、秘策縦横、至らざるなく、彼亦推薦の署名者として其責逃るゝ能はず。翌年三月、彼七十六歳、重患に沈むを以て王の嚴責あり、城を出てゝ命を待たしめられ、一切の官職を免せられ、彼恐懼乘輿、東郊を出て謹慎し、翌月終に卒す。

彼の歿後十二年、珍島の人、彼の舊日の宅基に書院を立てゝ享祀す。後十一年、忠州の儒者、溪灘書院に李灘と合祀す。其後又三年、尚州道南書院に享祀す。

蘇齋の相業は、何等顕著なる事功を立てし者なし。唯坐して朝廷を鎮し、能く有為有能の士流を愛し、善を奨め悪事を為さざりしのみ。東人彼を評するや、皆以て一代の賢相となし、李東阜〔浚慶〕と並稱す。然るに西人及西人に近き人の批評は、彼を視るに唯た無為無能、永く相位に居る術に長したる老物を以てす。其の代表的なるは李栗谷なり。其の『石譚日記』の所記の彼の批評は前後一貫沔渝らす。蘇齋相となるや、曰く

「古人則歴變履險、氣節彌厲。蘇齋則不然。廿年遷謫之餘、氣節稍尽矣。」

然れども、當時は李朝五百年文物の最盛期に當り、人才朝に盈ち一命の士比々、文と識と共に為すあるに足る者ならざるなし。而沔宣祖其人、有為の天分を以て齡、方に壯、霸氣横溢し、又藻鑑の明を自信す。是間に立ちて前後十六年、大臣の席を占めて安穩なりし彼は、決沔尋常無為無能、不得要領の好々爺にはあらず。恐く氣深沈、度量宏潤、坐沔衆心を鎮する大人物なりしなるへし。當時の諺に「蘇齋の唾津、能く腫

氣を医すと云へり」と。

但し彼は、其謫裏の初期は猶壯齡元氣者なりしか~~は~~、何時を果沔なき否運の纏綿に憤りて酒に逃れ、其健康さへ毀損せんとせる事あり。彼に比して綫に於て三日の長ある李退溪は、庚申年即蘇齋の四十六歳の時の彼に對する答書に於て、反復丁寧蘇齋の能く自重し節酒して靜に天運巡環の時機を俟つべきを述へて、之を誡めたり。先蹇後展、両半生兩極端の運命を荷へる彼の生涯は、李朝名臣中の稀覯に属す。

2. 学説

蘇齋の学問は、當時の儒者退溪、金河西〔麟厚〕等醇朱子学者と其の説を同うせざる所あり。為に退溪、河西、柳眉岩〔希春〕、李一齋〔恒〕等より論駁せられし事、屢々に沔、而沔屈せず変せず。実に彼の学は、頗る禅学の浸潤を受け、更に転沔明羅整庵の心性説に傾倒し、終に其の学風及性理説に於て朱子学と異趣を執るに至れり。

蘇齋の幼学啓蒙の師李灘叟は、朱子の注釈に依りて『小学』『四書』を授くる学者に沔、格別一見地を出せる人にはあらず。彼の為学の要領を得しは、前述廿七歳の時、晦齋に謁沔「勿忘勿助長」の教を受け、恍然と沔契する所ありし時なしか如し。

而沔卅三歳、珍島に配せられ、謫裏の風月全く読書を樂むの外なすべき事なく、益々彼をして深く心の工夫に向て進ましめたり。即聖賢語は、要するに吾心を正して外に累せられず、其境遇の得失順逆に對沔、夷然と沔静慮を保ち、此に動かされざるに在り（となす）。されは、経伝も其大要を取りて以て我心を存養する資料となせば、則足れり。諸家の註釈を参看して遑々焉と沔文句の研究に没頭するに當らず（と謂ふ）。彼は謫裏の苦を打克つべく、一方酒詩の三昧境に遊び、他方虚心静慮の静坐三昧に入れり。偶々

一禪宿の来りて彼を蘇齋に訪ふあり。数日滞在して禪家の心要を述へ、大に彼を撃発する所あり。其老宿は果沔何人なりしか、彼之を言はず、前述「夙興夜寐箴註」にも彼は単に其言に感動せるを言ふのみ。

然るに此頃の禪宗の大匠にして彼の西山大師と並ひて有名なる浮休善修の事蹟に拠れば、浮休は其の得法後、蘇齋の家の蔵書を借覽し、七年に沔業を畢へたりとあり。浮休は全羅道檜樹の里人なり、或は珍島に於て彼に面語せる事ありしか。是頃の僧侶は学道及情誼の上より名ある人を訪ふ為には百里数百里を陸路水路を少しも憚らざりしなり。

彼は、其後得意の境遇に入らる後も、僧侶と締交し往来を絶たす。(壬辰役僧軍大将)松(雲)大師惟政も、京城にありて彼に従て詩及經典を学へり。従て彼の撰せる「夙興夜寐箴註」は僧侶間にも伝播愛読せられ、後杜暹なる僧、醵財して之を刊行せることあり、又全羅道の僧侶か『父母恩重經』[仏説父母恩重難報經]を刊して広く江湖に頒つや、蘇齋之に序文を冕せり。

蘇齋の学の禅学の影響を受けし尤明瞭なる誦(者)は、彼四十五歳珍島にありて撰せる「人心道心辨」、及四十八歳に製せる「執中篇」の二篇に沔、一世の学者の批難攻撃を受けしも、亦此二篇にあり。彼は、朱子か人心道心共に心の已発に就て言ひ、道心は心の知覚天理よりし、人心は形氣よりす。故に道心は純善、人心は善惡を兼ねとなすに對し、惟へらく既に人心に善惡ある以上、更に又外に善なる道心を挙げ言ふ必要なし。人心の善なる部分即是道心の外なしと。

斯くて積工数年、偶々彼の弟克慎の彼の為に贈來れる羅整庵の『困知記』を繕きて「道心是未発、人心是已発」の説に接し、乃豁然として

積疑氷積す。但し此は『朱子語類』に弟子か當時禅義を以て道学を説ける張无垢の説を挙げて問へる内に、无垢か

「道心者、喜怒哀樂未発之時、所謂寂然不動者也。人心者、喜怒哀樂已発之時、所謂感而遂通天下故者也。」

と定義するを質して朱子の排斥を受けしに見る如く、朱子の説に反する者なるは言を俟たざるなり。

然るに蘇齋は、朱子か初に程子の説に従て心を以て専ら已発を指す者となし、後晩年、未発已発共に心と謂ふを妨けずと改めたるを引用して、道心人心・天理形氣の説は其の初説を改むへきして未だ改めざりし所の者に属外ならずと強弁す。而沔彼は、惟精惟一の意義を解して

「精者、察人心、即所謂察夫二者之間而不雜也。在学者即動時功也。一者、存道心、即所謂守其本心之正而不離也。在学者則静時功也。」

となし。更に進みて執中を解釈して、惟一惟精と同様の義となし、未発時の涵養、已発時の中節に外ならずとなす。」「[改行の印か]

蘇齋一生の法門は、心の静虚を求むるに在り。心の静虚を求むるの工夫は無欲と静坐存心の外なし。能く心の発動沔種々なる想を起す以前の湛然たる状態を守り存せは、其の已発の場合にも明通に沔常に對境をして心を紊さしむる事なし(となす)。されは、彼の功夫に於て尤肝要なるは、未発時の存養守静即(是)なり。恐らく彼の修養の工夫の全部は、此に集注すと言ふも可なるへし。従て道心人心の解釈を朱子に従へは、是の工夫の最肝要なる部分を閑却する結果となる。×(右脇:×何となれば、朱子に従へは、二心共に已発を謂ふ者なれば也。)

張无垢か程朱の説に従はず、道心を未発と倡ふる所以、亦此にあり。道心を以て未発となし、

⁵ 『永嘉禅宗集』に「惺惺寂寂是、惺惺妄想非。寂寂惺惺是、寂寂无記非。寂寂就是定、就是止。惺惺就是慧、就是觀。」とある。

其存養涵泳の工夫を以て已発時の省察の根本となすと云ふは、禪宗に於て寂惺⁵即定慧〔禪定と智慧〕を要訣となす所の坐禪と相契合して略差違なし。故に彼は「人心道心辯」に於て胡雲峰〔胡炳文〕の説を引きて

「胡雲峰曰、先在惟精而重在惟一。亦可謂得其旨矣。」

と云て、未発の工夫の最重きを言はざるを得さりき。此に更に溯りて、彼の説の起源に向て批判を加ふるに前述の如く、朱子は本と性と心とを峻別して天地の性、即本然性に復るを以て修養の理想境となし。是の場合、心は舞台に於て性は役者なりとなす。然るに禪宗及陸王二氏（陽明 陸王二氏）は、心と性との区別を没却し、之を単に一心を以て包括す。即理気性情等を包含して之を綜括する所の具体的心を以て修養の舞台に於て又役者なりとなし、単的に一心に向て工夫を下す。されば、道心を以て性即理よりの心、人心を以て形気よりの心と分晰するを厭ひて、直に静時の心、動時の心となし、静時の工夫に依りて修養を統一せんと欲するなり。

此處に於ても禪学の蘇齋の学説に影響せるを見るへし。故に退溪か當時の人物を品評するや、蘇齋を以て陸象山の見を守る者となし、甚た恐るへしと云へり〔李良齋溪山紀善録〕。又李澤堂も彼を評して謫裡に『困知記』を得て之に傾倒し、爾後所述、言々句々皆陸王の意に外ならず。朝鮮の学者禪学を雑ふるの端を啓くと云ふへり〔澤堂集〕。

四端七情理気発説に付ては、彼の著述に所説を見るなしと雖、奇高峰か壬戌正月廿五日付〔退溪高峰四七論争を開始して第三年〕蘇齋に送れる書に

「所謂陰陽之太極、七情中之四端者、深契下懷、忻幸良深。大升平日所相力辯者、正在於此。茲得開示、漫用自信。」

とあるに依りて、蘇齋か四端を以て七情中善な

る部分を挾撃して之を指すとなし、高峰の説に相合するを知るへし。是は、四端七情を道心人心に配して本性より発すると形気より発するとに區別する退溪の根本思想に對して、道心人心を実体的に區別なく、単に人心の動静と觀る蘇齋の学説に在りては、當然の皈結なり。但し奇大升か是点迄想到りて而して蘇齋か自説に左袒するを欣ひしものなりやは明ならず。恐らくは然らざるなるへし。

彼の詩文、亦其の学問の李朝学者中にありて珍奇なる者に属すると均しく、亦頗る珍奇なる者なり。張溪谷、崔簡易、車滄洲（雲輅）の如き李朝有数の作家は、極口彼の詩を賞揚し、三百年彼の右に出る者なしと迄言へり。然れども、彼の詩文は何れも太抵、語句法、用字格、異常にして頗る難渋。之を読みて彼の文理暢達、表現の明晰に由りて得らるゝ快感を味ふこと能はざる者、過半なり。されども、斯かる古惟洪晦、佶倔聱牙〔文章が難しく読みにくいさま〕なる裡にありて自ら大家の骨力肉頭し、人をして驚歎に堪へざらしむる者あり。されば、彼か出来る丈平易なるへく力めし文章は、反りて文理條暢、用字法あり、井然と於て道学者の文章上章（乗）なる者に属す。例へば、『夙興夜寐箴注解』、『字訓』、『童蒙須知』の小説の如し、彼は文章家としても決して第一流を降る者にはあらず。左に録する数章は、彼の詩を代表する者に数ふへし。

「十六夜 感嘆成詩」

「八月溯聲大、三更桂影疎、驚栖無定颯、失木有奔馳、萬事秋風落、孤懷白髮梳、瞻望非行役、生死在須臾。」

「寄尹李二故人」

「由来嶺海能死人、不必馳驅也喪真（上欄外：真元氣也）、日暮林鳥啼有血、天寒沙雁影無隣、正逢蘧伯知非歲、空通蘇卿返國春、災疾難消老形具、此生良觀更何因。」

（左脇：蘇武、在故地十九年得返。）

蘇齋の著述は、悉く『蘇齋集』十七巻に収めらる。他に『大学』に関する著述ありしも、今泯ひて伝はらず。

彼は壮年、珍島に謫され、五十歳を超えて京に返り、直に大官に登りしか故に、門人に接するを得し時期は（在）珍島十九年の謫裡なり。故に門人等は、殆ど皆珍島に赴きて彼に従遊せる者なり。以て當時僧俗を問はず、學者の不遠十里負笈の美風を見るへし。曰く盧大河、光州の人、官府使。曰く康復誠、號竹礪、信川の人、官知中枢府事。曰く白光勲、號玉峰、海美の人、參奉。曰く沈喜壽、號一松、大提學、大臣。白・沈共に今集を伝ふ。

此の中、白光勲は、李朝盛代の名詩人、所謂三唐の一人なり。蘇齋の唐詩を學へる詩風は、玉峰に至りて更に出藍の域に入れり。三唐とは、崔慶昌孤竹、李達菘谷及玉峰、是なり。能く唐詩を學ひて其の情其の調其の神を得たればなり。但し明末清初の詩の大家に於て明末復古派の主張に對し宋詩、元詩亦取るへしとなし、其の作亦能く李・杜・韓・白・蘇・陸〔游 1125~1210〕・元〔好問〕〔1190~1257〕虞〔集〕〔1272~1348〕に出入せる。

錢謙益牧齋〔1582~1664〕の『列朝詩集』を編するや、新羅より李朝宣祖に至る詩家四十二人を選ふや、三唐には孤竹二首を取り、菘谷卅六首を取り、而して玉峰に一首も取らず。是れ恐らく其の元集、吳明濟〔萬曆年間朝鮮に来る參軍なり〕〔朝鮮詩選〕に循れる者なるへきも、頗る公平を欠く。家数に於ては三唐中、菘谷第一なるも、其の尤唐調に豊なるは、予は寧ろ三唐中、玉峰を推さんとす。

「綾陽北亭〔舊別：玉峯詩集上〕

「長堤日晚少人行、楊柳青々江水聲、為是昔年離別地、不縁離別亦多情。」

「籠江別成甫」〔別尹成甫名唯幾〕

「千里奈君別、起看中夜行、孤舟去已遠、月落寒潮鳴⁶。」

三、花潭門人及李一齋

（1. 花潭門人）

徐花潭か、開城に在りて太虚一元の主氣説を倡道してより、其門人等の花潭を崇拜して大儒となす者等は、師説を承けて主氣となり、以て李退溪等の醇朱子学派と相對す。而して畢竟退溪等の揮斥を蒙りて、次の時代に至りては、寂として学界に聲を潜む。

花潭の弟子、朴淳思庵、許擘草堂、鍾城令球（蓮坊）、鄭介清因齋等は皆師説を繼承して之を唱道せる者なるも、其中、李蓮坊と鄭困齋とを著者とす。

鍾城令球、字は叔玉、蓮坊と號す。宗室なり。篤学力行、初に業を嚴用恭、尹鼎に受け、後花潭に従て業を訖ふ。其の著作今伝はらずと雖、其の学説に就て退溪・栗谷二氏共に論する所あり、又近代嶺南巨儒李寒洲震相も其の大著『理学綜要』に於て蓮坊の学説を批判す。

蓮坊は、程林隱復心の「太極陰陽圖」を評して



「此圖極好。夫天地判後、都是氣。陰陽動靜、只是氣。氣上可推、其理耳。 - - - 孔子曰易有太極、亦先言氣也。 - - - 恐程朱所論、亦不大過於此圖意思也。〔右蓮坊答草堂書也。性傳、昔在門下、得見程復心此圖。有疑致思、未得其故。偶與草堂語及之、草堂亦疑焉。即質于蓮坊、則其論如是。性傳之惑滋甚。蓮坊此說、若泛論理氣則可矣。若論此圖則性傳所未解…〕」

と云へり。然るに退溪は（大に）此説を不可となし

⁶ 『玉峯詩集』上には「月落寒江鳴」とあり、題に「籠江」はない。版本の相異か。

「蓮坊、見気不分明、主張太甚、有此差失、無足怪也。獨程林隱、一生林下工夫、亦有此失、可怪耳。苟如二人說、太極圖只陰陽一圏足矣、何必別有上一圏耶。中圏亦爲氣、何更有陰陽圏耶。〔退溪集卷卅二、答禹景善問目〕」

蓮坊、別に又「理気図」を製して其の理気説を詳説す。退溪亦之を揮斥す。蓮坊は、又心には動静ありとは謂ふべきも、体用ありと謂ふは虚説なりと云へり。

蓋し蓮坊の言、簡にして今其の意味の詳細を悉く（知る）能はさるも、（恐らく）李寒洲の批判、之を悉すものなるべく、理なる者、本と形式的条理に外ならさるか故に、自体には動静することなし。唯た一方気か機に由りて動静するに由りて動静する如きのみ。故に心を動静に由りて体用に區別し動を情、体を性、用を情とするか如きは、只是れ気機に因る動静に過ぎさるのみ。決して心か体となりて理現れ、心用となりて気出つるか如き意味に解すへからさるなり。故に蓮坊曰く

「心固有体用、而探其本則、無体用也。」

是に至りて、気か心に於て主たる位地を占むるに至り、主理説を取る朱子・退溪と相容れさるに至る。

蓮坊の事蹟、今詳なる能はさるも、退門の禹景善か、程林隱の「太極陰陽図」に於て潭門許草堂に質し、草堂更に之を蓮坊に質し、又栗谷も其の理気論を挙げて之を批評する所あり〔『栗谷全書』語録〕。以て蓮坊か、花潭の理気説の深源に悟入し、花潭歿後、潭門主気説の権威（代表者）として一般に認められしを見るへし。朴守菴の「鍾城令挽」⁷には、蓮坊を以て己卯時の（好学）賢宗室朱溪君醒狂に並へて賛せり。

鄭介清、字は義伯、困齋と號す。羅州の人。少にして立志堅固、学業専精なり。初め世人科

第を以て親を悦はすを見て挙業に従事し、郷試に中る。

既にして『四書』を読みて其の深義を悟り、意を名利に絶ち、笈を負ひて濟州の山寺に赴き土室を築きて兀坐讀書究理し、経伝医薬卜律の書、通せざるなし。次て京洛に赴きて花潭に就きて益を請ひて異聞に接し、豁然省悟する所あり。同門の朴淳と友誼を締す。其学、困齋裡より覺得たるを以て自ら困齋と號す。

晩年、務安の淹潭に卜居し精舎を輪岩に築きて講道す。遠近來学者頗る多し。彼、礼を執ること尤厳、地方の礼俗、依りて一変す。人以て全羅道第一等の儒者となす。

彼、朴淳、李山海、盧守愼等の大官とも書簡往復して其の知遇を得。萬曆辛巳、童蒙教官に叙せらる。次て羅州訓導に進み、既にして參奉に擢せられしか就かず。丁亥、萬言疏を上げて君徳を陳へ、谷城県監を授けられ、官にありて徳政多く、民去るを惜む。

既にして己丑の獄起るや、彼亦逆賊と宣告せられし鄭汝立と親善なりきとの招辞に依りて逮せられ、杖を受けて慶源に配せられ、到著するや杖傷に因りて疾を致し、七月廿七日卒す。享年六十二。

困齋の著述は『愚得録』三卷、『隨手記』九卷ありしか、『隨手記』は湮ひ、今『愚得録』を伝ふ。許穆、之に序して西人の奸を切言して南人の為に冤を鳴す。『愚得録』は、困齋平生の詩文集にして由て以て彼の学問の大体を窺知るを得へし。彼は花潭の門下に名を列するも、主気を主張すること、蓮坊、思庵、草堂の如く明確ならず。但た卷一に「善惡皆天理論」二章及「善惡皆天理説」一章あり、李朝儒学々説中にありて一異彩を放つ。

朱子学の天理（の公）に感ずる心にして是れ

⁷ 『守菴先生遺稿』卷之一に「朱溪人去絶芳塵、今到蓮坊刮眼頻。未死上書期報主、平生讀易要知新。風流執友齊星斗、多少儒林識鳳麟。遙想草堂風月地、瑤琴一匣久傷神。」とある。

純粹天理の性に基き、人心即形氣の私に感ずる心に汚氣に基く。道心は即公義の心に汚善、人心は即私利の心に汚即惡の原のある所となし。明白に天理と人欲とを區別して善惡の根本を此におくりおき、善惡は単なる程度の差違なるのみならず、本質的に差異あるとなす。故に善惡共に天理に根すとは謂ふへからさるなり。(左脇：乾元一氣)彼の説の基く所を尋ねれば、程伯子か私教の生死即涅槃、煩惱即菩提の迹を襲 ☰ (其の真(乾)元一氣の宇宙觀より下りて真(乾)元一氣か稟賦の不齊に由りて千差萬別なる萬物となるも、其の天理の外に出てす。所謂不齊即天理なる如く、人の善惡即不齊亦然り。)

「善惡皆天理、謂之惡者本非惡。但過與不及便如此」と云ひ、朱子之を解釈して

「此只是指其過處言。如惻隱之心、仁之端、本是善、纔過便至於姑息。羞惡之心、義之端、本是善、纔過便至於殘忍。故它下面亦自云、謂之惡者本非惡。」

と云ひ (へる如く)、専ら善惡を中と過不及となし、本質的差違を認めさらんとする説に淵源するか如し。

然れども、困齋の「善惡皆天理説」は(天理を理と)別に又理氣の關係より悟入して(天理を理と觀て)、現實の人にありては本然の性を認めず、皆氣質の性のみとなし、又理は単に是れ自然の理法にして本と善惡を超越す。善惡の生ずるは専ら氣の作用に因る。而汚其の(而汚其の)氣質の差異は即天賦に由りて本然の性の円具を變することあらず。例へば、無色清浄の水を種々の色容器に盛れば、各々色を異にして見えて、而汚其の矣、(各)清水には何等差異なきか如し。故に善人善物にも天理の本性増減なし。此を善惡皆天理と謂ふなり。

(上右脇：困齋「善惡皆天理説」第二に曰く／「惻隱羞惡之當與不當、雖異而不可謂非人、則善惡皆天理之説、其又何疑。況彼所謂至善性善

者、即陰陽△⇒上左脇：△氣質之中而指其本然之純粹、不雜乎陰陽而為言也。程子所謂皆天理、即本然純粹之善而指其動必◎⇒下右脇：◎以氣之理不離乎陰陽而為言也。知理(氣)之不能相離則其曰至善性善、非有見於善惡皆天理之説。☱⇒下左脇：☱其曰善惡皆天理、非有礙於至善性善之言、因可與論矣。故程子曰不是。性中元有此、與物相對而生也。)

彼の丙子七月作「善惡皆天理説」に「理初無善惡之分、而當其乘此氣而動靜而流行、以生成萬物之際、因其氣之清濁而有善惡之別、非謂理中本有此善惡而生此善惡之物也。以其氣有清濁而然也。」

斯くて、氣か人間に取りて最(重)要なる働を営む者となり、諸般道徳修養問題も、氣に至りて始めて有意義となる。

是に至りて、彼の朱子・退溪の倡ふる如く、理は至善なり本性なり、而汚人心にありては惻隱羞惡辭讓是非として其の端緒を発現し、他面世間の惡は、此の理の蔽はれて現れさるか為の故に起るとなせる者なるか故に、是れ天理にあらず、専ら形氣の作用にして、即人欲なり迷なり無明なりとなし、専ら性の拡充を工夫する學説に對して、全然相合するを得ざるに至る。然れども、花潭主氣説は遂に發展して此に到るべきものなりとす。

但し『退溪集』廿九卷「答金而精書」に拠れば、潭門の許曄草堂亦常に善惡皆天理を唱へ「易曰、八卦定吉凶、吉凶生大業。於此可見善惡皆出於天理也。陽生陰殺、陽淑陰慝、天理自然非有作為也。」

と云へり。但し此は老子的思想を多分に取入れし者にして天道を絶対善と立て人道の此に則ることを以て道徳哲学の第一原理となす、儒教思想にありては容るへからさる所なり。恐らく潭門明理の研究猶精微達せず。草堂其の人に汚猶此の混沌境に彷徨して自ら覺らざりしならん。

(天理を理気の理と観ず、(真の)天理即自然の意義に用ふ。困齋と草堂何れか果して師花潭の真意を伝ふるか攷なし。)

2. 李一齋

萬曆四年六月即宣祖の九年、李一齋、全羅道泰仁県に歿し、其翌年墓碑を立つ。文は其従甥蘇齋の撰する所なり。一齋、諱は恒、字は恒之、星州の人。高麗以来の名門なり。弘治己未、京城に生る。

器宇宏偉、豪氣超凡、勇力絶倫、武科に及第せるか、廿八歳頃、一旦発憤して学に志し、先づ『大学』句読より始め晨夜輟めず。一日、隣家高漢佐の壁上「朱子十訓」、「白鹿洞規」を掲ぐるを見、問て其の己卯の学者の課程なるを知り、疎然として為学の軌を悟り、専ら我心に就て道を求め、道峰山望月菴に入りて収心静坐し、経伝の語句一々之を体認心得せずんは已ます。

既に沔大夫人を奉して泰仁に帰り、畊稼に力めて略衣食に乏しきを告げさらしめ、朴松堂(美)の道学を聞き(善山に)赴きて学を問ひ、侍閑久しう沔所得ありて帰り、寶林山麓の幽静境に小精舎を築き蔵修の處となし、扁して一齋と稱す(謂ふ)。周濂溪の『通書』聖学⁸に聖学の要「一即無欲に在るを云へる」に取るなり。

(其の学)泛覽を務めず、直に孔孟の心地を求むるを以て学的となし、晩に『易』を好み兀坐其理を究めて措かず。遠近従学者多く、郷閭亦其徳に化し、稱して(奇高峰と並ひて)湖南(を兩分し彼は)(上道)第一となす。

明宗の晩年、賢を致すに急、丙寅年、彼亦薦められて(出で)仕へ、林川郡守を拝す。翌年、病を以て辞し帰る。後、五度、官を以て召されしも、病重くして赴かず、四度、医を遣されしも、治せず、丙子年歿す。享年七十八。

今『一齋集』一卷あり、又別に金『河西集』、李『退溪集』及『蘇齋集』中にも若干彼の学に就て記する所あり。彼は志学稍や遅れ、又明師に就て為学正軌に循て進まさりしか故に、其の所見弘からず、詩文共猶烹煉に到らず、学説の発表亦極めて短拙。要するに、自得の境地を固守して道を日常踐履(の實際)に求むる德行派の学者なり。従て修業方法、静坐収心、専ら体認を尚ひ、禅僧の坐禅に類する所あり。而して其の学説に於て朱子の理気心性説と合はざる所のものあり、李退溪は指して異学となす。即李一齋、性気不二説(道器不二)を持して高峰・河西と往復して下らず。高峰、其説を以て退溪に報し、退溪乃ち批して異学与朱子学に反くを揮斥せるなり。

蓋し理気二元論を(論にありて)主理説は統一すれば(を立つれば)、理は一層根本的となりて、理の具現する活動即力と材料との方面を指して氣と謂ふこととなり。又主氣説を立つれば、理は氣の動く迹に現るゝ形式的条理に外ならざることとなる。而して一齋は、主理にも非ず主氣にも非ず、理気の對立するか儘に其實一物なりと立するなり。其説を窮むれば、理気は實在の二方面にして、此二方面を離れて實在を見ることは不可能なると同時に、理気は隔離せる二物には非ずとなる。而して一齋の觀たる實在は、眼前歴々たる具体的物象を意味し、此の具体的物象に於て理と氣は渾然一体となりて決して分界なしと云ふ所迄進むと看ざるへからず。

高峰に答ふる書に曰く

「太極之論、古人云雖專言理而氣在其中、雖專言氣而理在其中。理氣雖二物而其體則一也。兼一而二、二而一者也。」

又曰く

「易曰、太極生兩儀。蓋兩儀未生之前、兩儀存

⁸ 「聖學第二十」に「聖可學乎。曰、可。有要乎。曰、有。請聞焉。曰、一爲要。一者無欲也。無欲則靜虛動直。靜虛則明。明則通。動直則公。公則溥。明通公溥庶矣乎。」とある。

乎何處。兩儀已生之後、太極之理、亦存乎何處。從這裡面深思明辨則庶見理氣之渾然一物耳。」

而沚一齋は、理氣混然未判の一物をは、天地に在りては太極、人にありては一身即唯心、是なりとなす。理氣は、一太極を説明するに當りて用ひらるゝ二属性的概念のみ、理氣實に二物として存在するに非ず。猶人の一身を其の本質に觀て理氣に由りて構成せらるゝとなすも、決沚一身内に理と氣とか界限をなして分存し、一心の作用の外に理氣各作用をなすにはあらず。故に彼の宇宙觀は太極一元論と稱すへし。既に理氣相分つへからず。故に形而上・形而下にて區別する道・器の區別亦必要なり、方便説たるのみ、實際には太極陰陽の道器、理氣を分つを要せず。又性情、理氣と云ふも、一心の説明の方便上の區別に外ならず。是に至りて、朱子か劉叔文に答ふる書に

「理与氣、決是二物。但在物上看則二物深淪、不可分開各財一處、然不害二物之各為一物也。若在理上看則雖未有物而已、有物之理。然亦但有其理而已、未嘗有是物也。」

と謂て、明に理氣の存在に先後を認め、断して二物となすと相反す。

一齋は、又心先つ動くか、性先つ動くかの問題に對して、心先つ動くの説ありて退溪一派の反對を招けり。一齋は、心は兼理氣、統性情の者にして、能く一身の主として虚靈知覺を有す。されは、一切の精神感動及應酬は、先つ外界か心の知覺に入來るに由りて起らざるへからず。苟も知覺に入來らざる以上、如何なる強度の刺激も有する外界と相對するも、何等感応なかるべきなり。故に曰く、心先つ動く、と〔答許參議書〕。

然るに、退溪の門人金就礪は、一齋の此説を許草堂より聞きて再三退【第二冊終／第三冊始】溪に質す所あり。退溪も、此説は他の一齋の説に比して頗る精細に沚論理的なるをは認め

乍ら、尚一齋か朱子の語に

「動處是心、動底是性。」

とあるを、看透する能はざるの致す所となす(して、就礪の説を印可せり)。即性は、心の内に存するか故に、一切性の動静は心を空間として起滅するの外なし。而沚心は統性情、性即理体なるか故に、一切の心の動静は、動静する所以の理に因りて起らざるを得ず。心の外に性の動く所なく、又性動かすして心独り動くことなし。動静する所以の理由を内面的に觀れば、性に帰せざるへからざるか故に、性動きて心動くと見るを得べく、動静する處につきて外延的に觀れば、心の動静となさゝるへからず。例へは、四端を惹起す外物の目に感ずる場合の如きも、動く處は心即視覺に於てするも、動く所以は仁義礼智の性に因ると解せざるへからず。而沚此論争は、一齋の理氣の界分を認めず、一心を以て之を綜合する思想より來りし所のものにして、仮りに醇朱子学と云ふ立場を離れて看れば、確に一個の学説として成立するものなり。

【つづく】